

コクマの塔

加名山炯斗



【塔の魔術師見習い】

波の音が聞こえる。

崖に打ち付けられる、荒々しい波の音。それが、酷く心を落ち着かせてくれる。

荒く、波の碎かれる音。時折強く、風の音。心地の良い微睡。

ノックの音が響き、それは絶たれた。

「…フィア？」

「…あ、はい。どうぞ」

目を擦りながら身を起こす。

そういえば自分を引き取ってくれた後見人が来る手筈になっていたのだ。

「寝ていたのか。出直そうか？」

現れたのは少年のようななりをした後見人。少し呆れた顔をして寝惚け眼の私を見ていた。

「大丈夫です。お忙しいのにすみません」

「それは構わないが…では入らせて貰うよ」

運び入れたばかりで散らかったままの荷物を適当に寄せて、小テーブルと椅子を使える状態にする。お茶は…用意するのは無理そうだ。

「ええと、すみません」

「気を遣わなくていい。今は気軽に接してくれ」

着座し、向いあう。

「では改めて。僕は君の後見人になったルエイエだ。この学校の責任者を務めている。宜しく頼む」

「はい。フィアです。宜しくお願いします」

「ああ。フィア、今は状態も落ち着いているように見えるが、最近の具合はどうだい」

「急な暴走はここ暫くありません」

「そうか」

ルエイエ先生は探るように私を見つめている。視線に耐えかねて、少し顔を逸らした。

ここは「コクマの塔」と呼ばれる魔術師の学校だ。

私は生まれつき強い“魔力”を持っているらしい。でも残念ながら全く制御ができない。最近暴走させる事は少なくなったものの、周りからは危険物として扱われている。

育ての親はどうやら高名な魔術師だったらしい。その父を亡くし、危険物扱いの私は今回この学校の主であるルエイエ先生に引き取られることになった。生徒として通わせて貰える事にもなっている。

“魔力”というのは珍しい力らしく、希少な研究材料……という意味も含まれていて、保護と研究の名の下入学金などもかなり免除して貰っている。

ルエイエ先生は父と交流があったので以前から偶に様子を見て貰っていたし、暴走時処理をしてくれるのはいつも先生だった。だから入学金などの免除にあたり冗談めかして「研究体としても価値があるから」なんて言われても、そんなに怖くは感じなかった。感謝の気持ちの方が強い。

「ではフィア、入学の書類は出来ているかい？」

「あ、はい。お願いします」

「うん……確かに。明日が新規生の入学式典だから、遅れないよう気を付けてくれ。今日はゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます」

「それから——君の体質の事だが……隠せとは言わないが、あまり公言しない方がいい。色々な輩がいるからな。なにかあったらすぐに僕に言ってくれ」

「……解りました」

隣にいつ爆ぜるか分からない爆弾が座っていることを伝えておかなくてもいいのだろうかと思わないこともないが、心無い対応をされることもそこそこ多かったので従っておくことにする。

「では失礼するよ。明日また式典で」

「はい。ありがとうございます」

見送って、戸を閉める。

明日から新生活。不安もあるし、楽しみでもある。

一人になった部屋の中。

波の音が聞こえた。



入学式典は厳かに開始された。

ルエイエ先生の挨拶が終わり、肅々と進行していく。入学生たちは皆真面目な様子で真剣に式に挑んでいる。当然だろう。私は特例中の特例だが、此処は優秀な生徒の集まる最高級の学舎なのだ。

だと言うのに――

「へーえ。思った以上に人少ないねえ」

「!？」

隣に座っていた人が突然話しかけてきた。しかも小声とかではない。

褐色の肌に金の髪。好奇心の強そうな緑の瞳。他の生徒が紺の制服に身を包む中、真っ赤な上着が悪目立ちしている。

「てか今のこどもなに？」

「：静かにしてくれないか。あれは一番偉い先生。説明聞いてなかったのか」

「えー？なんで小声？」

ダメだコイツ。関わりたくはないけど、何とか黙らせたい。早くしないと巻き添えで自分まで怒られる。

「ねえねえこれ長くない？折角オクの日なんだからさー、遊びに行きたいんだよね」

「頼むから本当に静かにしてくれ。式典中くらい黙ってられないのか」

「おれさー金になるって聞いて入ったんだよね、ここ。あんま勉強とか興味ないしさー」

「お金稼ぎに来たんだったら、それこそもつとしっかりしろよ！」

「おふたりとも」

先生の一人がにっこりと笑みを浮かべて寄って来る。

「静かに出来ないなら出て行きましょうか」

「えええええ……！」

「……………」

式典会場から摘み出されてしまった。

幸い殆んどの説明は終わっていた……と思う……が。

「早く出れてラッキーだよな！ なーんだ、アレ聞いてなくて良かったんじゃない」

「なんで、私まで……」

「あははー。じゃーね……って、あ」

手を振って去りかけた身を翻し、

「肝心な事訊くの忘れた。おれジユウ。あんたは？」

「……フィア」

「おう、これから宜しくな！ フィア」

満面の笑みでそう言って、今度こそ彼は去っていった。
ジユウって……自由か。

閉式を見計らって校内を見て回ることにした。最初からその予定ではあったんだけど。
色々見て回って、最後に図書館へ向かう。

「これは…凄い」

壮観だ。今までに見た事の無い規模に圧倒され、キョロキョロしつつ中を歩いていると…

「うわッ」

「痛っ…」

しまった。誰かとぶつかってしまった。

「すいませ…」

「悪かったな。前、見てなかった」

「あ、こっちこそ…」

私を見ると、少し態度が変わる。ぶつきらばうな愛想の無い顔に、知り合いを見つけたような驚きが混ざる。当然私に知り合いの先輩などいないのだが――

「あー、あんた先刻の」

「え？」

「いや、式典中に騒いでた奴だろ。目立ってたから」
げ。

「まあ、絡まれてたって感じだったけど。要領悪そうだな、あんた」
ご理解頂けて何よりだが、なんだかとってもコムカツク。

「えっと、私フィアっていいいます。先輩：ですか？」

「アンタと同期だけど」

無然と答える様もとても同じ年には見えない。

「ウソだろ！ え、でも年上ですよね？」

「アンタいくつ」

「今年十六になりました」

「じゃ俺の方が年下だ。まだなってるない」

「ない！ 絶対ない！」

「失礼なやつだな」

驚いた。その落ち着き払った態度、絶対先輩だと思ったのに。

「：まあこれも縁か。よろしくな」

年下なら丁寧語は要るまいと、ラフな口調で握手を求めて手を差し出す。

「……」

彼は暫しその手を見つめてから、軽く握り返した。

「トートマシー・レクス・ベスタ」

「…………ゴティネイニ」

笑顔のまま固まる。コイツ、イヤな奴だ。

塔の住民は皆名が長い。真名の秘匿の意味合いもあり、略称を用いるのが普通だ。略称には二段階あり、本名、中略称、略称の順に短くなっていく。それを、こちらが略称で名乗っているのに、中略称で返してきやがった。

こちらが固まったまましていると、

「マキでいい。じゃあな特待生」

「あ、うん。また」

言い捨てて去っていった。

なんとも、愛想の無いヤツだ。

内部を粗方見回り終えて夕刻が近付いてきた。

塔は全寮制で、遅めだが門限もある。といっても寮は塔内にありあまり外出する者も多くないので実質あつてないようなものだ。

それはともかく、部屋に戻る前にどうしても行っておきたい場所があった。

塔の裏手。激しい荒波が寄せる断崖絶壁。部屋まで聞こえる波音の発生地だ。今は夕陽が差し、橙に染まっている。

「……………」

「キレイだろ？」

「え？」

音を聞きながら呆つと海を眺めていると、背後から声を掛けられ驚いた。

「うん？ 見ない顔だな。あ、新入生か」

「は、はい…」

現れたのはとってもキレイな人だった。ピンクゴールドの珍しい色合いの髪に紫がかつた瞳。すらつとしたシルエツト。

「じゃあ俺センパイだわ。宜しくね。俺カルタ。かわいい君は？」

「か、かわいい…ええと…フィアって言います」

「よしフィアちゃんね。…ん、君魔力あるんだ」

「え…？ ええ、はい」

隠した方が良いと言われていたが、早々にバレてしまった。恐る恐る様子を伺うと、先輩は気

にした風もなく寧ろにつこりと微笑んでいた。

「うん。いいね。君の傍は居心地が良い」

「…はあ？」

「じゃあねフィアちゃん。君となら是非何度でも会いたいね」
…行ってしまった。

センパイとか言ってたけど、変な人だなあ。

寮に戻り食堂へ向かう。夕飯の時間帯だ。

適当な定食を注文して空いている席を探す。

「あ」

アレは…さつき図書館で会った：

「ん。一緒に食べる？」

目があったマキが正面を勧めてくれた。お言葉に甘える事にする。

「…それ、全部食べられるのか？」

彼の目の前には炭水化物とタンパク質がパーティーしている。

「？当たり前だろ。食べきれない程頼んだりしない」

「あ、そう」

まあ食べられるというのなら文句はない。

「マキ、受講科目ってもう決めてる？」

「決めてる」

迷いない即答だ。

「そうなんだ。私はどうしようかなあ」

一応何個かプランは考えてみたもののまだ悩んでいる。

「あんた特待だろ。特待は個別授業が選べるって聞いたけど」

「選べるっていうか……」

確かにそういう制度で通常二つまで先生を選べるのだが、私の場合は補習的な意味合いの方が強い。

内容も力の制御のための物で、ルエイエ先生によりすでに二科目とも決められている。

「ん、それって特待だからなの？」

後からひよこつと現れたジユウは、私のおかずを攫って隣に座った。

「ジユウ：それは私のメインディッシュです……」

「美味しそうだったんだもん」

既に口の中だ。

「今年の特待はクセの強いのはっかだな」

溜息一つ、マキは自分のおかずをひとつ私の皿へと移した。

「いいの？ ありがとう」

「じゃあおれも！」

「おまえにはやらん」

「なんでさ」

激しい攻防戦を見守りつつ、これ以上奪われないようさつさと食事を片付けていく。

「そっか。ジユウも特待なんだな」

「うんそうみたい」

「式典の席次から判るだろ」

そういえば隣だったんだからそうかもしれない。でも知らなかった。

特待生ということはジユウはかなり出来が良いか、私みたいに何処か特別な問題があるということになる。

「なにフィア」

「ううん」

能天気な笑顔からは、とてもどちらにも見えないが。

授業プランは結局魔力制御を第一目標にして組んだ。基礎は必修でやるから、実践的な内容を重視して組んだのだが。

「あれ。あんたもこの講義とってたんだ」

「あ、うん…実践論理で一番解りやすいって聞いたから居合わせたマキはしたり顔で頷いた。

「んー。まあそうだろうな。有名な人だし。ざっくりしてるから。でも基礎が出来てない場合少しキツイんじゃない」

「え。そうなの？」

「まあ、特待さんには余裕だろ」

しまった…かも知れない。

やばい。とにかくやばい。

今まで魔術の勉強をしてきたわけでもないし、ハイレベルな学校でいきなり学び始めるのはそもそも無理のある話だったのだ。あれから数個の授業を受けてみたが、殆どついていけそうにない。

焦燥が募る中、ルエイエ先生の初回授業の日がやってきた。

「やあフィア。君には僕からも授業を施そう。調子はどうかな？」

「先…生…」

顔を合わせるなり泣きついた私に驚いて、慌てて話をきいてくれた。

「ああそうか…それは…努力して貰うしかないんだが…」

特待の名が周りからの評価も厳しくしている。このままでは大変居心地の悪い学校生活になってしまう。

「うーん：基礎学科もみてあげたいところではあるんだが、中々なあ」
 しまった。先生を困らせてしまっている。

「あの、易しい参考書とか、基礎の基礎を押さえた書物なんかがあれば…」

「そうだね。某か手配しよう」

「すいません」

「気にしなくていい。教師は生徒のやる気を応援するものだ。君に意欲があるのならレベルに合わせて考えなくてはな」

あ バカな子だと言われている…！

「さて、では本題だ。君に教えるのは魔力の運用技術。まずは簡素なものだがこの杖を渡しておこう」

渡されたのは木製で短めの杖。大きめの宝石を冠しているが、初心者用の既製品だ。

「魔術というものは、依代を介した方が安定して使いやすい。通常は大気中の精霊を石に宿して力を分けて貰うんだが、君の場合は石に自身の魔力を通して精霊を招き使役する…という形になるだろう。他人より強力で多様な魔法が使えるようになる。ただし命令式を与えるのは他人より難しいと思う。必要以上に魔力を取られないようににも注意しなくてはいけない。まあその辺は追々だな。まずはやってみよう。杖を握って、魔力を通してみてごらん」

杖を握り締め、集中する。すると宝石の周りにいくつかの光が灯った。カラフルな光は石の周りを円を描いて浮遊している。

「これが寄つてきた精霊たちだ。うん、無節操だね。この中から一種類の精霊に対して命令を与える。今は複雑な命令は出来ないだろうから、取り敢えず熱の精を蠟燭の芯に集合させてみよう」

浮遊する光の内、青いものだけを蠟燭へ誘導させるイメージでひたすら念じる。

暫くすると浮遊していた光たちは消え、蠟燭の芯が辛うじて焦げ始める。

「うん、よしよし。焰が灯ったね。こんな具合だ。闇や熱、電、磁の精霊は気まぐれに癒してくれる事もある。覚えておくといい」

ルエイエ先生の授業は、他の座学に比べたらうんと解り易かった。基礎座学を修めないと如何なる実技も難しいと聞いていたが、習った計算式も使わなかったし、言われた通りやればなんとかなった。存在自体の式とか反応を起こすための式とか、全て理解していないと実践出来ない——というのは脅しだったのだろうか。

ともかく。うまくいかない続きだった中漸く初めての成功体験を得られた事は素直に喜ばしい。感覚を忘れないよう、何度も蠟燭を灯し続けた。

ふたつめの選択個別授業の日が来た。今日はとても緊張している。

「フィアさん、私の授業は初めてですね。宜しく願います」

「ご指導願います」

先生の名はケミオ・レルベリイダ。入学式典で、ジユウと私を摘まみ出したその人だ！

「そんなに畏まらなくても大丈夫。始めましょう」

「さもなくば、私に構わず、レルベリイダ先生は授業を始める。」

「魔術の行使には、高い精神力が求められます。その為の精神統一を行います。同時に貴方なら魔力も高められるでしょう」

先生は部屋に並んだ水晶球の一つ取り、正面に置く。

「精神統一には水晶球を使いましょう。一つ支給しますので当面はコレを使って下さい」

「あ…ありがとうございます…」

「では始めましょう」

この授業も理論より感覚だったので難なく乗りきれた。初めは緊張感でうまくいかなかったが、繰り返す内に集中出来るようになっていった。

授業のない日も定期的に行うようにと指導を受けて、初回は終了。

気が付けば、入学してひと月が経とうとしていた。



「そろそろ半年程経つが、生活はどうだ？」

ルエイエ先生には月に一度近況を報告することになっている。今回で六回目の報告だ。

先生や友人の助力もあり授業にもなんとかギリギリついていっている。

「ふむ……どうやら魔力の運用技術はいくらか向上しているようだ。暫くは杖に頼る事になるだろうが、これに関しては気長に行こう」

先生は私を観察して、少し安心した様子でそう言った。

「勉強以外に関してはどうだ？ なにかあるか？」

「特には……勉強を教えてくれる友人も出来ましたし、先輩も優しいです」

「それは良かった」

マキはかなり知識があつて、聞いたことは大概なんでも教えてくれる。少し、いやかなり嫌みな所もあるけれど、慣れてしまえば気にならない。寧ろ世話焼きな内面が見えてきて、お母さんみたいだなと思ひ始めている。

カルタ先輩はなにかと甘やかしてくれる。ちょっと距離が近いのがいつも気になるけど。

ただ、自由すぎる同期には手を焼いているとも伝える。

「ああ、ジユウ君か。彼には僕達も悩まされている。センス・技術・知識、どれをとつても不足は無いんだが……うむ」

先生は一度言葉を切るが、やがて諦めたように息を吐いた。

「まあ、もう少し協調性が望まれるが、彼には仕方ない処でもある。偶に……が出てしまっているしな」

後半かなり声量を落としていてあまり聞き取れなかった。

「いやなんでもない。広い心で接してやってくれ」

こんなところか、と先生はひとつ頷いた。

「では来月も励んでくれ。何かあったらすぐ報告するように」



試験前。私たちはマキの部屋にお邪魔していた。

「マキちゃん、そろそろお腹空いてきた」

「おれこないだのアレがいい。煮込んだ肉」

椅子のない机の上には広げられた教科書やノート。その上に突っ伏して餌をねだる雛が二匹。

「おまえらは何しに來てるんだよ」

時刻は夜半過ぎ。一応試験勉強の為に集まっている。

そもそもマキもジウも試験直前に勉強をしないとイケないような出来ではないので、これは私の為にふたりがかりで教えてくれる会なのだけでも。

「おなか空いたら集中できないだろ」

「満たしても集中できないだろ」

そう言いながら目の前にゴンツと器が置かれる。中にはラムネ玉がたくさん詰まっていた。

塔ではラムネ玉やチョコレートといった糖菓子が好まれる。チョコレートは少し高いので、学生たちには特にラムネが人気だ。人気と言うか、必需品に近い。

「ラムネええ：おれ肉がいい」

「なら食堂に行け」

マキは料理が趣味なのか、よく凝ったものを作る。本人は錬金術の練習の延長と言っているが、先日の葡萄酒で長時間煮込んだ肉は確かに美味かった。

ラムネ玉を口に放る。すつとすぐ溶けて、即座にエネルギーに変わる。

「あれ…まさかこれ」

購買で売られているものと差違を感じて顔を上げる。案の定マキはしたり顔をしていた。

「マキは何でも作れるな…」

「どうせあんたたちがバカスカ食うでしょ。作った方が安い」

「マキ製？」

すつかりマキブランドのファンと化しているジュウは目を輝かせてラムネ玉を頬張る。

「…ラムネ」

「そりゃそうだろ。ラムネ作ったんだから」

一気にやる気を奪われたらしくジュウは床に丸くなった。

「寝るなら帰って」

「フィアが帰らないならおれも此処で寝る」

「私は此処で寝てったりしないぞ」

糖分補給で回転数を取り戻した頭に術式を叩き込む。なんだってこんなややこしい式を覚えなきゃいけないのか。

「いや寧ろなんで理論も理解せずに魔術が使えるんだあんたは。流石特待生は違う」
文句が口から洩れていたらしい。マキは呆れ顔でそう言いながら、ノートの隅を二度ペンで叩

いた。記述にミスがあったらしい。

「ここで使う触媒は鉄」

「触媒とかさゝ要る!？」

どうせ精霊頼りなのに、と口を尖らせる。

マキに言っても仕方ないのは解っているが、ムダに覚えることを増やされているように感じてしまう。

「わかるゝ触媒意味わかんねゝ」

寝転がったジユウからも同意が上がる。

「特待さんたちは魔力たつぷりで羨ましい。普通は触媒使って効率上げないと反応させきらないの」

「…そうなんだ」

マキが小難しい顔で睨んでいるが目を逸らしてやり過ぐす。無くても大丈夫な人がいるようなものは必須基礎に入れないで欲しいものだ。

「ルエイエ先生に言ってみようかな」

然して本気ではないがそう呟いてみると、マキはまた微妙な表情でこちらを見ていた。

「あんた、ちょいちょい学長の名前出すけど親しいの？」

「あれ言ってなかったっけ。ルエイエ先生は私の後見人です」

「は？ ……は？」

二回聞き返された。目を見開いて顔を突き出すように尋ねてくるその様に若干身を引きながら肯き返す。

「そりゃあ特待も納得だけど……はあ？」

うう……ノートに落とされたマキの視線が『ならなんでこんなに出来が悪いのか』と雄弁に告げている。先生の名誉のためにも以後これは口外しないようにしようと心に決めた。

「マキちゃん！」

「……っ、重い」

食堂で見つけたマキに思いっきり飛び付くと、受け止めてはくれたものの衝撃を殺しきれずふたりしてふらふらとよろめいた。

「試験受かった！ ありがとうー！」

「ああそう、良かったな」

そっけない返答のマキを感謝を込めて力一杯抱き締める。苦しいと文句は言うが抵抗する素振りは無かったので満足いくまで絞め続けた。

「試験つてのは自分の習熟度の確認でしかないんだから、無理矢理合格しようとするもんでも

ないけど」

「基礎試験落ちたら面目ないだろ！」

少し小声にしてそう返す。

「あー、あんたはそうか。大変だね」

「大変なんだよ！だからマキが居てくれて助かってる。ありがとう！」

「……どういたしまして」

キョトンとしたようなムスツとしたような。なんとも微妙な表情を作るものだ。

「ちよつとー公衆の面前、人の集まる食堂で堂々とイチャイチャしないでくれるー？」

「あ、先輩」

声を掛けてきたのはカルタ先輩だ。先輩も偶に勉強を教えてくれる。優しいし解りやすいんだけど、脱線してしまうことも多い。試験前には不向きなので今回は遠慮した。

「いいでしょ」

「うん羨ましい」

取り合った手を見せ付けるようにしてマキが無表情で言うと、先輩もそれに真顔で返した。

そろそろとマキから手を離し、先輩に向かって腕を広げる。

「わーい」

ぎゅうっと数秒のハグの後、わしわしと頭を乱され解放された。先輩は私を犬か何かだと思っ

ている節がある。

「基礎試験合格おめでとう、フィアちゃん。次は何取るの？」

ありがとうございますと返し、続ける返答に困った。

「マキは錬金術進んだよね？ ジュウは専攻決めずに取り敢えず医術取って言ってたな…。
私は——」

正直全然展望がない。

「カルタさんはどう進んだの」

言い淀む私に、マキが助け舟を出してくれた。

「俺は攻性術系で取ってきたから。呪術得意だし」

「ふうん。フィアは実践系のが得意だろ。攻性術も取ってみたら」

流石おかあさん頼りになる。

「マキちゃん。好き」

「うん」

「えー…なんだこれ」

「げーじゅつは？」

またまたマキの部屋に集まっている。今回は勉強目的ではなく単に遊びに来ているのだが、私の授業計画の話になりジユウはその提案を持ち出した。

「新設の。攻性術は研究進む気ないなら将来性が希薄だし、その点新規分野の芸術系は夢いっぱいじゃん？」

く：ジユウはこういうところがある。基本アホっぽいクセして色々ちゃんと考えてるし計算も出来る。自由が売りのジユウに真っ当なことを言われると、自分のダメさに落ち込みそうになつてしまう。

「それに完全実践系だし。初歩幻術とか一度やってみたら？」

「あー、あったなそういやそんなもの」

マキはなまじ進む道が決まっている分、新設科目に向ける興味が無かったようだ。

「確かに紹介は目を通してんだけど、まあ忘れてた」

ジユウからこんなに建設的なアドバイスが聞けると思ってたし、ここにきて増えてしまった選択肢に頭を抱える。

「いいんじゃない、幻術取ってみるのも。俺もあんまり知らない分野だし、教えてよ」

それに、とマキは付け加える。

「芸術は学長が就任した時に運営方針転換の象徴として設立された科だから、あんたが取るの、

喜ばれるんじゃないの。わかんないけど」
……決まったわ。次は芸術科目から選択します。



塔の側には神殿がある。成功の鬼神ラベゼリンを祀る分神殿だ。

側、とは言っても塔から出るだけで結構な遠出なので、行こうと思ったら朝から出掛けないといけない。

というわけで、日曜^{オッ}の今日は遠出をしてみることにした。

ゴンドラドラゴンで塔を降り、乗り合い馬車で近くまで。そこから十分くらい歩くと、神殿が見えてきた。

特にイベントのある時期でもないため人も少ない。ゆっくりと中を巡って最後に拝殿へ入る。

「おやあ、初顔だ」

「!？」

丁度無人かと思ったが、背後から声を掛けられた。振り返ると、変わった格好をした人が一人。褐色の肌に大きな瞳。薄手のワンピースと色の薄いピンクの髪をひらひらと靡かせている。：風はない。

「参拝か？ ようこそオレの神殿へ。：おまえは魔術師かな」

「そ：う、だけど：」

自らの神殿と呼ぶのなら神官長か、そうでなければ――

「オレはラベゼリン。宜しくな、若き魔術師」

鬼神。神様。願うだけで特定の魔術に相当する力を与えてくれる、意思持つエネルギー体。本物を見るのは初めてだ。

「…おまえ、何か…えらく懐かしい力を持ってるな」

「…懐かしい？」

小首を傾げてこちらを観察するラベゼリン。神に凝視されるなんてこの上なく居心地が悪い。

「…まあいゝが。オレの神殿内ではそれを振り撒かないでくれよ」

「??」

魔力の事だろうか。他に心当たりも無いし、多分そうなんだろう。

振り撒くと言われても、自分からどう放出されているのかも知らないし自製の仕方は解らない。魔術を使わなければ平気だろうか。

「さあ参拝者。用件を聞こうか。おまえはどんな『成功』を望む」

「あ、えーと」

困った。特に強い願いを持ってやってきたわけではない。神に直接会えるなんて考えてもいなかったし、ただの縁起担ぎだったのだが。

「まあ構えるなよ。世間話みたいなもんだ。おまえはどんな『成功』を望む？」

例えば特許が取れるような術式や商品の開発とか。例えば世紀の大発見とか。望む人にとって成功とはそういうものなのだろう。

要は夢、目標。現状、私の望む成功とは――

「力の制御が出来て、他人に恐怖を与えずに済むこと――…かなあ？」

空っぽだ。授業選択の希望を訊かれた時と同じ。具体的な展望がない。望みが漠然とし過ぎていて目標も計画も立てられない。形にならない。

「……」

ラベゼリンの沈黙が痛い。

「なるほどね。オレの利益はりやくまだおまえには届かない。『成功』のヴィジョンがもう少しハッキリしたら、また来てみるといい」

「……うん…」

がつくりと項垂れる。折角遠出をして来たのに、ただただ落ち込んでしまった。

「さて魔術師よ。おまえ住処は塔だろう。そろそろ戻らんと途中で日が暮れる。凍え死んでも助けてやらんぞ」

「あ、うん…お邪魔しました」

「フィア、何かあったか？」

夜、定期報告にルエイエ先生の元を訪れたのだが、一目で落ち込みを見抜かれてしまった。本当に頭が上がらない。

「今日は神殿に行ってきたんですが、少し疲れてしまったようで」

「神殿というと、ラベゼリンの神殿か？この国で厚く信仰されている成功の神だな。何度か会ったが、コクマにはそぐわない南国衣装が目を引く」

ひらひらのワンピースに褐色の肌、大きな花の飾り。確かに見慣れない衣装だった。

「アレは福の神のようなものだから、君も会えるとイイコトがあるかも知れんぞ」
だといいます、と笑顔で返す。

実際は会ったのです。そして落ち込まされたのです。とは流石に言えない。

ルエイエ先生は少しだけ訝し気にしていたが、それ以上の追及はしない事にしたようで話題を変えてくれた。

「基礎試験は合格したようで安心した。次のステップは決まったか？」

「色々考えてはみたんですが——その、芸術の科目を受けてみようかな、と」

「ふむ。理由を訊いても？」

心臓に、細く冷たいものが走った気がした。

「あ、えっと。攻性術と迷ったんですけど、ちょっと調べてみたら芸術って面白そうなの多いな〜って…」

嘘ではない。全然嘘ではないが、本音とも少し違うかも知れない。

先生は無言でひとつ頷くと。

「そうだろう！新しいこと、馴染みのないものに興味を向けられるのは良いことだ。興味を感じたものは片っ端から試せばいい。勉強とはそういうものだ」

輝いた瞳で力強く肯定してくれた。吃驚して言葉も無い。

「必要だから学ぶ、というのは当然大切だが、必要なくても気になったら学べばいい。知識があればあるほどいいからね。思わぬところで助けになる。無駄な事などないし、どれだけ寄り道したって良い。いろんなことを知れば、その内君の行きたい先だって見えてくるさ」

息を飲む。

ただ驚きを隠せずにいる私に、先生は「だから」と続けた。

「周りを気にせず、自分のために学びなさい」

「先生……」

「うん？」

「……大好きです……」

「ありがとう」

なんて伝えていいか解らずにずれた台詞を返す私に、屈託の無い笑顔を向けてくれる。

先生には私の悩みなんてお見通しだった。それは何故だか凄く嬉しくて、うっかりしたら泣き

そうだった。

理解して導いてくれる先生が居て。一緒に考えてくれる友達が居て。未来は全然見えないけど、現状はとても幸せだと気付いた。言われた通り、今は闇雲に学んでみよう。

見てろよラベゼリン。次に会う時は堂々とあの問いに答えてやる。

私の望む『成功』を見つけ出す事が差し当たりの目標になった。



「ふう……」

廃品を規定の置場に納め、一息吐く。

机や釜、実験器具や金属塊、雑誌や古布。色々な物が堆く盛られている。放っておけば隔月で業者が回収してくれるが、ここに置いてあるものは誰でも持つて行つて良い事になっている。リサイクルは魔術の基本だ。

一通り眺めて見るが、めばしいものは特になさそうだ。

「——なあん」

「お」

廃品置き場の一角に、ネコたちが陣取っている。一際大きなトラネコがそこから抜け出し、足にすり寄ってきた。

「おお……よしよし。でっかいなあおまえ」

少し撫でてやるとゴロゴロと喉を鳴らして膝に頭突きを繰り返して来る。デカイ体でそれをやられるとそれなりのダメージが入る。仕方ないので倒されないようにしやがみこんで相手をする。

とぼけた顔の無邪気なトラネコは、どうにも見たことある顔に見えた。

「そっくりだなあおまえ」

「うなうん？」

暫く撫で転がしてから立ち上がる。

「そろそろ戻らないと。じゃあなジューキャット」

「今日もネコいるかな」

別にネコに会いに行くわけではなく、今回も物資の運搬だ。

「お、いた。おまえたちいつもここに居るのか？ 確かに日当たりいいしな」

自棄にでっかいネコが今日も擦り寄ってきた。やっぱり見た事ある顔をしている。

「うなあああ♪」

「おう、ジュー。ん、そう言えばおまえはいつもは居ないな」

「うなん？」

「：月一くらいか？ 前も月初だったような…。うん、掃除の日だったもんな」

毎月第一日曜オクは廃棄の日だ。

「うん」

「ん、返事したコイツ。うり、よしよし」

「うるるるるる♪」

ネコを撫で転がしていると、同じく廃品を運んできた様子の先輩に声を掛けられた。

「あれえフィアちゃん。こんな所でしゃがみこんでどうかした？」

「ありや先輩。いや、ネコと遊んでます」

先輩はネコを視認するなり、

「ジユウじゃん。あそつ、今日第一オクか」

「やっぱジューですかコイツ」

「見たまんまでしょ」

先輩から見ても似てるらしく、ジユウと呼んでいるようだ。納得しかない。

「しっかりいいなあ、こんな手でフィアちゃんに構って貰えて」

「るるるる♪」

呆れた顔でネコに手を伸ばす。ジューもご機嫌に撫でられていた。

「今日もネコいるかな」

今日はニボシが手に入ったのでネコにあげに行くことにした。

「お、いた」

第一オクを狙った甲斐あって、今日もジューは其処に居た。

「うるあう♪」

私に来るのが解っていたように寄ってくる。

「よう、ジュー。ニボシ食べる？ニボシ」

「うん」

心なしか首を振るような仕草で、差し出した煮干しを嗅ぎもしない。

「え、食べない？」

「うん」

「あ…」

他のネコたちがニボシに集り、あつという間に食べられてしまった。

「ジュー…おまえグルメなのか…」

「うん…」

「次はお目に適うモノを持参します…」

「今日はチーズだ！」

今日は前回のリベンジに良いチーズを手に入れてきた。

しかし不安もある。今日は第一月曜^{ツル}なのだ。ヤツは居るだろうか。

「どうかな…？あ、いた!!」

「おう」

私を見つけて寄ってきてくれる。

「ジュー、チーズは食べるか？」

早速しゃがみこみ、チーズを乗せた手を差し出――

「食べるよ」

「!？」

「食べるよ」

「――」

驚きで真っ白になり、差し出しかけていた手も開かない。

「え、くれるんじゃないの」

「……え、ジュー？」

周りを見回すが誰も居ない。誰かの腹話術……という事もなさそうだ。ていうかジューから聞こ

えてくるし。てゆーか、でも、……知った口調だし。

「なによ。チーズは？ チーズ、ちーず」

「……………はい」

漸く開けた手の上でチーズを食べ始めるジュー。

食べ終わって、指まで舐めて、美味しい口をしながら見上げてくる。

「うま！」

「…それは良かった」

ジューは鼻をクンクンさせながら私の手の中を除き込む。

「もうないの？」

「ないよ。…それより、話せるなら訊いてもいいかな」

「なに」

「…なんで喋れるの」

どう訊いたものかと思案したが、取り敢えずそこから攻めることにした。

「喋れるっていうか、戻れないんだよ」

「うん？」

戻れない、ということとは。

「静天は終わったのに何でか戻れないんだ。いや、言葉だけは使えるようになって良かったけどね」

あーもーこの喋り方、知ってる。

「おまえ、マジでジュー？え、ニアミなの？」

「？そだよ？ずっと名前よんでくれてたじゃん」

「あーうん、そーなんだけどな…。そうではなかったというか」

ニアミ。獣血種ユイエンの中でも比較的数の多い、ネコの種族。とは言えその生態の多くは知られていない。優れた身体能力と高い玄力を持つと聞く。

そうか。ニアミは晴天の日はネコになるのか。

「：戻らないって、授業はどうした？」

「えー？ 出てないよ？」

悪びれもせず当然のように言う。

「いやそりやそうだよな。：静天以外にも人型取れないって、よくある事なのか？」

「滅多に無いねえ。ていうか初めてかなあ」

「大丈夫なの？ それ…」

此方が心配になるくらい、本人はケロッとしている。

「んー？ そうねえ。だって初めての事だし、よく解んないや。体の変化って、起こそうと思って起こしてるわけじゃないし、どうしようもないんじゃないかなあ」

まあ、種族特有の状態は他種には解らない。本人が心配していかないのならいいのかも知れない。
「んな!!」

「どうした？」

突然ビビビと毛を逆立ててジュウが鳴いた。

「あ、戻れそう、今戻りそう」

「突然!? いや、良かったじゃん」

「うおっ!」

唐突にジユウは見事なハイジャンプで窓を突き破って塔内へ入っていった。

「すっげー」

結構な高さがあるがひとつ跳びだ。

「いってえ! あ、ガラス刺さった、痛い痛い!」

多分あの辺は廊下だろう。ジユウの騒がしい声と転がり回る音が聞こえてくる。

「…ジユウ君、戻れたのか。良かったな。取り敢えず僕のコートを貸すから。下だけでも隠して行きなさい」

「あっチビ先生。超サンキュー! 危うくフィアに色々見られるとこだった」

「君にも恥じらいが有ったと知って安心した。いいから早く行きなさい。人が来るよ」

「ん? 別にいいよ? チビ先生にも見られたじゃん」

「君が良くても他人は見たくないものだ。いいから早く!」

「……」

居合わせてしまったルエイエ先生に同情しつつ、私はそっとその場を後にした。

また第一オクがやって来た。

「ヤツは今日もネコなんだよな…?」

ちよっと様子を見に行ってみよう。きつと資材置場に居るんだろう。

「やつほーフィアー。いらっしやーい」

「あれ? ジュウどうしたの」

そこにいたのはいつものジュウだ。ネコじゃない。ただし、

「見てよ何でか部分変化」

耳が尖っているし、長い尻尾が揺れている。

「前回に続いて不調だねえ。なんでかなあ?」

不思議そうに自分の尾を見つめている。

「ニアミについては何も言えないけど…診てもらった方がいいんじゃないの?」

「そうだねえ。まあ、いざとなったらオカンのところ行く」

「あそっか、家族に聞いた方がいいかもね」

流石に立て続けの不調で前回よりも多少は不安を感じているらしい。

仕切り直すようにジュウは地面にちゃんと座って、自分の前を数度ペチペチと叩いてみせた。

「ねえねえほら膝枕」

「なんでだ」

どうやらここに座れというアピールだったらしい。意味が解らない。

「？毎回してくれてたじゃん。撫でて撫でて」

「あれは…、ほら、な？」

「なんでー？あれ好きだった」

擦り寄ってくるジユウをいなして間合いをとる。

「だめ。あれはネコ限定。ていうかもうだめ。封印」

う…尻尾が垂れて力なく揺れている。

「撫でるだけ、撫でるだけな。ほれ、よしよし」

「~~~~♪」

あ。

うん。撫で心地は一緒だ。そりやそう…なのか？

「んにゃ〜♪」

「つて、ぎゃ！うわばか！倒れ…る!!」

思い切り体重を預けて擦り寄ってきたジユウを支えきれず倒れた。当たり前だ。こんな重い男唐突に支えきれるか！

「んなあ？」

「…あら」

「な〜ん♪」

押し倒された形になるが、猫になってるならまあ良かった。
ところでこの散乱した衣服どうするんだろうか…。

次のオクの日。

商店街をひやかしていると、近くから怒声があがった。

「こおのドロボー！商品に勝手に手え出すんじゃないよッ!!」

驚いてそちらへ目を向けると、髪を逆立てて吃驚している知った顔があった。

「うわッ、え、なんで??」

「なんでってなんだい！当たり前だろう!?今喰った分さっさと金払いな!」

店主は完全に激昂している。

「えええ。持っていないよ。だつていつもただでくれるじゃん」

「バカお言いでないよ！そんなわけないだろう？金払うまで逃がさないからね!!」

「困ったなあ…。あ、フィア」

げ。実に嫌なタイミングで見つかった。

「フィア、助けて〜」

「…いや、自業自得じゃないのそれ。なんで助けなきゃ…」

…………ぐ。おばちゃんの視線が痛い。

「フィア」

「……………はあ。お幾らですか…」

「いいですか。人間の形をしている時は、お金を払わなくてはいいけません」

「え〜〜」

ネコの時に何度か施しを受けていたみたいだが、その調子で商品に手を出したらそれは犯罪だ。今まで誰も教えてくれなかったのだろうか。

「難しい〜だってどっちでもおれなのに」

「………そうだね」

その一言は、結構響いた。気持ちとはとてもよく解る。

「けど。おまえの意識が人間ならどっちの時でも対価は払いなさい」

「うえっ」

もう聞きたくないとばかりに逃げようとするジユウの肩を掴み、みっちりお説教しておいた。



「——つてことがあって。本当ジユウの奴……」

友人の愚痴を、先輩はにこやかに聞いていく。あまりに聞き上手なものだから、いつもつい言い過ぎてしまう。

すいません、と小さく謝ると先輩は笑顔のまま首を振った。

「いいよ、どんな話でも俺はフィアちゃんの側にいるだけで満たされるからね」

キレイな顔を崩さないまま、寧ろよりキレイに微笑んで臆面もなくそんなことを言う。

「また先輩はすぐそういう……」

「本当のことなだけ。信用無いなあ」

そりゃあこんだけ堂々と口説かれると逆に平気になる。というか、出会った頃からこの調子なので慣れてしまった。

「でも、触れられたなら——もっと、もっと満たされるんだろなあ……とも思うよ」

その一瞬の目付きがいつもと違って、背筋がゾツとした。慣れつつあるいつもの色気の放出じゃなくて、まるで殺気のような。本能的な恐怖を刺激する瞳だった。

「ええと……」

感じた恐怖を誤魔化し、先輩の手を取る。

「はい」

両手で握って見せれば、キョトンとした顔。

そして

「……ぶはっ、『触れさせて』くれたんだ？」

「お望みでしたので」

ツボに入ったらしくフルフルと笑い続けている。

「ふ、あははっ。うん、ありがとう」

発作は治まったのか、目尻に浮かんだ涙を指で拭いながら顔をあげる。

「いつかその首筋に、唇で触れたいな」

「……………先輩次第ですかね」

悪戯に微笑む先輩にそう返すと、またちょっと驚いた顔をして

「悪いヒトだね、フィアちゃん」

困ったように笑っていた。

「カルタ。前の論文さきに関してだが——おや」

「はい、なんででしょう？」

先輩は声を掛けてきた先生から私を隠すように立ち位置を変えた。それを、覗き込むように身を捻ってその先生は私に視線を向けた。

「——ほう。ほうほうほう」

顎に手を当てて、四方八方から覗き込まれる。

「え、えつと??？」

初対面の先生だ。

「先生、私に用なのでは？」

「待て。今忙しい。後にしてくれ」

自分から声を掛けてきたとは思えない言い種だ。

「な、なんでしょうか」

「君。君がひょっとして、学長の養い子かね」

「——」

言葉に詰まる。咄嗟には巧い誤魔化し方が思い付かない。どうしよう——

「やはり！　そうかそうか。呪学は興味ないかね？」

沈黙は肯定と受け取られてしまったらしい。

これで呪学は取れなくなつたな、とぼんやり思った。

「先生、ウイユ先生。今あつちをトビオカ先生が歩いて行きましたよ」

「なに！」

先輩の言葉に先生はバツと勢いよく身体ごと振り返る。

「ああ、カルタ。後で研究室に顔を出すように」

「わかりました」

それだけ言い残して、先生は凄早い早さで先輩が指差した先へ消えていった。決して走ってはいないのが恐い。

「ごめんねフィアちゃん。今のは呪学のウイユ先生。学長の事が大好きなんだ」

「あっそういう…」

悪い人ではないんだよ、というフォローを聞きながら、肺に溜まった空気を吐き出す。

「学長は『王』だからね。シンパも多い」

「王…」

それはなんか、解る気がする。自然と頭を下げたくなる。従いたくなる。指示を貰うと嬉しいし、指示通り動けると気持ちいい。その表現はしつくりくる。

「でも気を付けて。悪い人ではないけど、倫理観は壊れてるから」

魔術師だからね、と先輩は言った。

先輩の中で魔術師とはそういうものらしい。

「ウイユ？ ああ、生体錬金の」

マキに訊いてみたら耳慣れない単語が返ってきた。

「呪学って言うってたけど…」

「担当授業は呪学。でも彼が研究してるのは生体錬金」

そういうこともあるのか。なるほど。

「なに、それ」

「簡単に言うと、人体の複製とかそんな感じかな。臓器とか皮膚とか」

「うえ」

思わず顔を歪めてしまったが、マキは涼しい顔で続けた。

「火傷した肌を張り替えたり、失われた血液を補填したり出来るようになる。有用で重要な研究だと思うけど」

「あ、うん」

マキは真つ当な魔術師なので、どんな研究であれ否定しない。研究結果は全て使い方次第だ、と前にも言っていた。私は元々一般人なので、その感覚が解りにくい。研究内容から利用法を想像するのも上手くない。

「まあ本人がどう使うつもりかまでは知らないけど。あの人倫理観がちよつとアレだし」
「え」

先輩と同じことを言う。あの先生、何かやらかしたことでもあるんだろうか。

「とはいえ学長の目があるし、問題ある活用はしな——出来ない、と思うね」
それを聞いて思い出した。

「そういやさ、カルタ先輩がルエイエ先生の事『王』って例えてた。上手いよね」

「……それ、喜ばれないと思う」

マキは神妙な表情をしていた。

「塔は国との仲が微妙なの知らない？」

肯く。知らなかった。というか、塔も然ることながら国の事などサラサラ知らない。

「あ、そう。前学長は今国に仕えてる。今の学長に塔を追いつけられてね。ルエイエ学長はご存知の通り人気あるから国から見たら危険人物ってわけ」

「え、飛躍した」

そう？と軽く流してマキは続ける。

「だから『王』なんて呼んでちゃ、いつ『反意有り』とか難癖つけられるか解ったもんじやないでしょ。口にしない方がいいよって話」

なんだか難しそうな話で拒否反応が出かけていたが、最後に解りやすく纏めて貰えたので助かった。

「『い』の話はおしまい」

「そういうこと。忠告ついでにもうひとつ」

マキは一瞬明後日の方を見てから溜め息混じりに言った。

「あんまり、カルタ先輩とふたりきりにはならない方がいい。あんた、解ってなさそうだから」
「？」

好意を向けられていることだろうか？ それなら流石に解っているつもりだが…
「イチチャイチヤするくらいなら別にいいけど、いつか本当に喰われるぞ」



「そろそろ瞑想の授業も修了ですね」

「！」

授業の最後に、ケミオ先生はそう言った。

「かといって、日課として怠らないように。毎日の積み重ねで貴方の魔力は安定しているので。欠かせばまた乱れてしまいます」

「は、はい」

入学から今迄、一度も魔力暴走を起こさずに来ている。危なげなく安定していて、暴走に怯えていた昔が嘘のようだった。

忠告を真摯に受け取り頷く。

先生は優しく微笑んだ。

「では、特別授業が一枠空きますが…希望はありますか？」

「……」

私にとって毎度難題である授業計画を唐突に振られて暫しフリーズする。

「今までは止められていたかも知れませんが、そろそろ攻性術の受講も大丈夫ではないかと思えます。これからは補講ではなく、自身が学びたい科目を自由に選択できます。希望が決まったら教えて下さいね」

止められていた…という事実はない。実際、芸術か攻性術か悩んでいたくらいだ。

少し首を傾げながらも頷く。

「因みに先生は、元々担当教科は何だったんですか？」

「ああ、私は占術を教えています。興味がありますか？」

占術というと、がつつり座学。ひたすら資料の読み解きと計算を行うという、私に最も向かい
いと思われる教科だ！

「いいえ、すみません、いいえ」

幸い気を悪くした風もなく、クスクスと笑われた。

「なんで毎回俺に聞きに來んの」

「適切なアドバイスが欲しいです」

おかあさんことマキはこれ見よがしな溜息を吐いて相談に乗ってくれた。

「鍊金来る？」

「ムリ！」

占術に次いで無理。

「まあそうだろうな。前回迷ってたし、攻性術でいいんじゃない」

「投げやりじゃない？」

「いや、そろそろ自分で考えろよ」

仰る通りです。

「それはそうとして、幻術の方はどうなの」

「あ、楽しいよ！」

芸術の中から幻術を選択したワケだが、コレが思いの外楽しい。

まず理論が求められない。いや、皆は小難しい理論に従って術式を展開しているんだと思うが、その理論や術式自体を提示しろとは言われない。完全実技評価なので減点がない。先生も「創造性と楽しさが大切！」という授業方針で、求めればアドバイスをくれるけど比較的自由にやらせてくれる。

「へえ。よかったね」

うん、と肯いて本題に思考を戻す。

攻性術に決めるかとは思うが、ケミオ先生の言葉が少し気になった。止められているかも知れない——というのは、どういう意味だったんだろう。

「おまえか。ぼくの授業が受けたという特待生は」

「よ、よろしくお願いします」

攻性術の特別授業に来てくれた先生は、とても尊大な人だった。なんかいつもちよつとふんぞり返っている。でも自信があつてキラキラしていて、なんだか眩しい人だ。

「どんな高度な授業を望むかと思えば、基礎だど！ ぼくに基礎を教えろとは！」
そしてとても元気な人だ。

「まあいい。おまえに攻性術の特別授業を施す、ナナプトナフトだ。先ずはおまえの実力を知らんと話にならない。今からぼくが展開する術式を順に真似ていく」
言われた通り、ひとつずつ先生の術を真似ていく。

燃やしたり、通電させたり、風を巻き起こしたり、水を纏わせたり。

大概の術をちゃんと真似てみせる内に、先生も楽しくなってきたらしくどんどん高度になっていった。そして。

暴発した。

「——クドル！」

先生が誰かを呼ぶ声をしている。

私の意識は少し靄がかかったような、少しレイヤーがズレているような。何処か冷静に暴走した私を見ていた。

講義室の壁が一部壊れてしまったなどのんびり考えていたら、急速に意識が引き戻された。

「……せんせい？」

ルエイエ先生が暴走を治めてくれた時の感覚に似ていた。

「制御も出来んのか未熟者め！……ああいや、未熟なのは当たり前だ。おまえは学びにきているんだからな」

「あ、スナフ先生……すいません」

「この暴発は止め時を見誤ったばかりの責任だが、おまえもおまえでよく反省して精進しろ」
もう一度すいませんと呟くように謝って、身を起こそうと——したところで気が付いた。

「……」

傍には見知らぬ青年。格好からして多分生徒だと思う。

身体を支えてくれていたのは、つまり暴走を鎮めてくれたのは。

「そいつはクドル。おまえと同じ、魔力持ちだ。ただし制御は出来るぞ。教えて貰え」

「え!？」

魔力持ち。自分と同じ。

「先生、知ってたんですか？」

「当たり前だろう。講師は全員知ってるし、そもそもおまえの術の使い方と成績を見れば解る」
そりゃあそうか。危険な生徒情報ば先生たちの中で共有しておかないといざという時の対処が
出来ない。成績を見て察されるのは少し悲しいけれど…。
クドルの方を見る。

無表情で、まるで何処も見えていないような瞳。

「あの、ありがとう…ございました」

「………」

少し視線を下げてこちらを見た…ような気もする。すぐに逸らされた。興味なし、と言わんばかりだ。

「おまえの力量と必要な加減は大体解った。教室を片付けるからおまえはもう戻れ。瞑想を忘れるなよ。クドル！おまえは手伝え」

またまたすいませんと頭を下げてボロボロになった教室を出る。

外にはちらほら野次馬が居たようだが、私が出て来るとさっと散っていった。

「フィア君、大丈夫かい？」

夜。ルエイエ先生が様子を見に来てくれた。

「攻性術を選択する前、ケミオ先生に『攻性術は止められているかも知れないけど』って言われたんですよ。こういう事だったんですかね？」

「そうだね。攻撃的な力を扱うワケだから、少し濁り易いんだ。けど、基礎や初級ではそういう心配ないと思っていたから止めはしなかったんだが…すまない。説明しておくべきだった」
驚いて首を振る。今回はちよつとイレギュラーだった。術のレベルを上げながら連続でどんどん使ってしまったのが問題だったのだ。

「一応訊いておくが…受講を止めるかい？」

「……もし、よければ… 続けたいです。その、…楽しかったので…」

「そうか」

先生はひとつ頷いて。

「勿論だとも。毎回暴発されたら流石に困るのでナナプトナフト先生には無理はさせないよう言い聞かせておくが、生徒が望むなら学校は止めないとも」

そう嬉しそうに言ってくれた。

「攻性術を学ぶのなら、先生からも紹介を受けたと思うが、クドル君とも話をしてみるといい。マキ君とは違った方面で君の援けになってくれるんじゃないかな」

クドル。あの無表情な人。自分と同じ、でも多分、私よりも優れた魔力使い。

全然仲良く出来そうな気がしなかったけど、よく考えたらマキも第一印象は良くなかった。

「はい。先生、ありがとうございます」

ご迷惑を掛けてすいません、を飲み込んでお礼の言葉に変換しておく。

「うん。また何かあったら言ってくれ。おやすみ、フィア」



「あ、いたいた！クドル…さん！」

「……………」

名前を呼ばれて振り返ったが、それ以外に特に反応がない。

「私、フィアっています。あの、魔力の制御方法を教えて欲しくて」
そう伝えると一拍おいて頷いてはくれたものの、直後首を捻った。

「教えるって、何を」

「せ、制御方…」

あまりの愛想の無さにめげそうになりながら繰り返す。

「……………」

斜め上を見ながら黙り込んでしまう。

「ええと、じゃあ、あの時…どうやって私の暴走を鎮めてくれたんですか？」

「乱れた魔力を自分を取り込んで、調べてから再放出した」

質問を変えるとスラスラと答えてくれる。

「よく知る相手なら同調して鎮めることも出来る、と思う」

「そういう調整の仕方とかコツとか教えて貰えませんか」

ん、と肯いて

「丁寧語、使い難そうだから止めて良い」

とても助かった。

「どうだフィア、そろそろ上級もいけそうか？」

「単発なら、多分」

「まだ早い」

調子を訊いてきたスナフ先生に肯くと、すかさずクドルからストップが出された。

「最近おまえよく喋るな」

「言葉を尽くさないとフィアが迷走する」

先生が呆れた顔をしている。

魔力制御を教えて貰うようになって、確かにクドルは喋るようになった。当初寡黙すぎてこちらにも困惑気味だったが、なんとか意思の疎通が困難じゃない程度まで持ってこれた。クドルの端的すぎる言葉を受け取り損ねる度にクドル自身が改善してくれていった結果だ。

「互いに良い影響があるのは結構」

そして、最近はおそらくスナフ先生の授業を受けることも増えた。

「術の精度と威力は申し分ない。暴走させない持久力さえ身に付けば良い攻性術士になれるぞ。ぼくには及ばないが！」

「……………フィアは一度、寧ろ全力で暴走しきってみた方がいいのかも」

大胆なクドルの案に先生が苦い顔をする。

「デメルット犠牲がでかすぎる。少なくともぼくの目の届く所では試すなよ。責任を問われるのはぼくだ」

ひとつ背いて、クドルはそれ以上言わなかった。

「さっきの、どういうこと？」

授業後、クドルに訊いてみた。

「身体も手も大きい人が小さすぎる道具で細かい作業をさせられると物凄いストレスを受ける。力が溜まる。ムシャクシャする。爆発する。貴方の魔力暴発はそういう感じだから」

生成量に対して排出量が少なすぎる、または、持つてる力と使い途の質が合わないのでは、という話らしい。

「そういえば、クドルも暴走したことってあるのか？」

いつもこちらの話ばかりで、クドルの事をあまり聞いたことがなかった。

「最初の頃は何度かあったらしい」

「……………こどもの頃？」

最初という表現も然ることながら、伝聞形なのは、覚えてもないほど小さい頃…という事だろ

うか。

クドルは首を捻って、最初の頃、と再度言った。

「貴方と違って自分は後付けだから」

魔力を有する者の『構成情報』を、魔力を有さない者に埋め込む。そうしたら、元々持たない者であっても魔力を使えるようになるのでは？　そういう研究があったそうだが、被験者は何名か居たようだが、適応者はひとりだけだった。それがクドル。

「何度目かの暴走で記憶と感情が飛んだらしい。それからは制御出来てる」
魔力を持たなかった頃の自分をリセットし、魔力持つ者として新生した。

「……」

平然と教えてくれているけど、こちらはポカンと開いた口が塞がらない。

そんな私に気付いたクドルは察したように

「お腹空いた？」

「違う」

塔の事も政治の事も、全然知らないし解らないけど、術史の授業でやった程度の知識ならある。前体制の塔では戦力が求められていた。戦死率99・9%の戦いに挑む為の強力な戦力が。

腹の底から気持ちが悪い。

「顔色が悪い。医務室に」

「大丈夫！ 医務室に行く程じゃないから」

「だから、ウイユだよ」

「やっぱりかあ！」

気持ちの整理をつけるためクドルと別れ、即おかあさんに愚痴りに行った。

「人体の構成情報の複製、移植。まあ説明義務を果たして被験者本人の了承得た上での施術だからギリギリライン。ちょっとどうかnaoと思っても魔術倫理管理法に反してはない」

ぐぬぬと言い知れぬモヤモヤと戦っていると、

「クドルでしょ」

「えっ!？」

ちゃんとぼやかして喋った筈なのに、バレていた。

「本人が隠していないから」

隠してなくてもおおっぴらにはしていない筈だ。だって寡黙が過ぎるもの。

「塔は本当、いろんな奴がいるよなあ」

はあ、と大きな溜め息を吐いてマキは潰れた。

「…何。そっちはどうしたの？」

「別に。推薦で入ってきた新入生にあつという間に追い抜かれたなんて、気にしてないし」

「ひえっ」

マキは鼻眉目無しにかなり成績が良い。なんかもう、私には関われない世界の話だ。

「よしよししてあげよう」

「いらない」

珍しく断られた。

「アレの世話は全面的にぼくがみてる。何か問題があったか？」

スナフ先生にクドルの事を訊いてみた。

どうやらクドルとスナフ先生は私とルエイエ先生みたいな関係らしい。

「いえ問題は」

不思議とふたりを見ていると、失礼ながらスナフ先生が、クドルに懐いているような印象を受ける。なんであれ、仲は良さそうで結構だ。

「親しそうに感じたので」

先生はフン、と鼻を鳴らした。

「そう見えるか。まあ、置いていかれた者同士、仲は悪くないさ」

「置いていかれた？」

「アイツを造ったのはウイユだが、それを依頼して鍛えてたのは別の攻性術士だ。国に引き抜かれる事になって、暴走の多いこどもは連れて行けないとポイさ」
嗤うように話しているが、確かに怒気を感じる。

「その後記憶も感情も消えたから、本人は気にも出来なくなったがな」
良かったか悪いのか判断しかねる話だ、と先生は肩を竦めた。

「まあそういう前例もある。だからおまえも大暴走は試してみるなよ」
「…はい」

あの時の苦い顔はそういう意味だったのだろう。

「あれ、先輩調子悪そうですね」

「ああフィアちゃん。うん、実は少しね」

少しどころじゃなさそうな顔色だけど、医務室でも寮でもなさそうな方向へ進んでいる。多分研究区画へ向かっているんだろう。

「休んだ方が…」

「ううん、ありがとう。じゃあ、ちょっと急いでるから」

珍しく無駄口がない。これは相当具合が悪そうだ。急いでのというが、歩みも足を引き摺るように鈍重だ。

「…肩貸しましょうか？」

「あー、いいいい、大丈夫だよ。気にしないで」

無理な話だ。

「せめてついて行きましょうか」

「折角だけど…行き先、ウィユ先生の研究室だし。フィアちゃんは来ない方がいいなあ」

「行きます」

「え!？」

寧ろ行きます。

具合が悪そうな中心労を増やしてしまったが、先輩にくっついて生体錬金研究室までやって来た。先輩には本当に申し訳ないが、良い口実だった。

入口前で先輩は立ち止まり、困った顔でこちらを見た。

「ほら、着いたし。大丈夫だから、フィアちゃんはもう戻らない？」

「いやいや折角来たのだから、入っていくと良い。君なら歓迎するとも」
先輩は頭を押さえてズリズリと倒れ込んだ。

ウイユ先生の歓迎を受け、私は生体錬金研究室へと足を踏み入れた。

「さあ。迎え入れておいて申し訳ないが、これの処置が先だ。君は見学でもしていてくれ」

「先生、私はもう少し保ちます」

先輩が慌てたように声を掛けるが、先生はそれを見下して鼻を鳴らした。

「隠しているのか。愚かな選択だ」

「先生……！」

先輩は焦燥と怒りを孕んだ声で止めようとするが、先生は真顔のままで私へ向き直った。

嫌な予感がする。クドルの話を聞いたばかりだ。まさか先輩も――

「カルタは重度の貧血症だね。定期的に輸血を行う必要がある」

「え」

先輩がまた頭を抱えて大きな溜め息と共に崩れ落ちた。

「そうだったんですか」

「あー、うん。そう…ごめんね隠してて」

隠されてた意味はよく解らないけど、良かった。マキが例に挙げてたような医療行為だった。大体二十分くらい、先輩は研究室の奥で輸血を受けていた。本当に。

「……」

クドルの件は、塔の体制が変わる前の話だ。ルエイエ先生の目があれば倫理的に問題のあることは出来ないだろうとマキも言っていた。

研究室には何名か研究員も居て、それぞれに何かをしていた。覗いても隠されないし、疚しいところはなさそうだ。

「さて待たせたな、フィア君。生体錬金に興味があるとは喜ばしい」

「あ、いえ。クドルの事を、伺いに…」

「クドル…？」

先生は訝しげにその名を何度か繰り返して呟く。

「何だったか…」

覚えて、いない。

「スナフ先生の下にいる学生です」

「…ああ、ナナプトナフトの飼い犬か。……ああ、ああ。そうだ。君の情、報、を、移、植、した」

「え？」

「なんだ知らなかったのか？ 魔力を有す者などそうそう居ない。……」

先生の声が遠く聞こえる。

「そうだ。そうなる。複製して移植するなら原本が必要になるなんて当たり前じゃないか。」

「そろそろ」

肩を掴まれ意識が戻る。先輩が後に立っていた。

「失礼しますね、授業がありますので」

「そうか。また来ると良い」

先輩は動転したままの私を引き摺るように部屋の外へ連れ出してくれた。

「……大丈夫？」

「あ、えっと」

大丈夫とは言い難い。衝撃すぎてまだ頭が真っ白だ。

「あの研究室の人たちは異様に口が堅いから大丈夫。…クドルって、最近君がよく一緒にいる

子？ あの赤髪の」

無言で肯く。

「そっか。妬けるなあと思ってたけど…」

先輩はそこで区切って私に目をやる。

「…寮の部屋まで送るよ」

背中を押されて歩きだした。

「…フィア？」

寮区画へ入ると、マキと遭遇した。

ヨロヨロした私の歩みに眉を潜め、溜め息を吐いた。

「ほら、だから注意しろって言ったのに。忠告を聞かないから」

「？いや、先輩は送ってくれただけだよ」

忠告ってなんだっけ。ふたりきりは避けろってヤツか？

マキは目を据わらせたまま

「貧血じゃないの」

と尋ねてきた。そんなに顔色悪いだろうか。心的ショックを受けただけで、身体はなんともない筈なのだが。

「貧血だったのは先輩かな」

マキはしたりと頷いた。

「ほらやっぱり。吸われたんだろ、血」

「は？」

何を言い出したのかこの子は。していないけど、献血を表わしているのだろうか。先輩も苦々しく顔を歪めている。

「んー…マキちゃん。君、どうしてそんなことを？」

問われたマキは先輩へ向き直る。

「俺は生まれも育ちも塔下街なんです。…解り易く言うと、見てたので」

その答えに先輩は目を見開いた。そして一言。

「……………そっか」

ストンと力が抜けたように肩を落とし、目を閉じて息を吐いた。

「折角ウイユ先生がうまく誤魔化してくれたのになあ」

「えー…と？」

私は血を吸われたの件くだりからさっぱりついていけない。そろそろ説明が欲しい。

応じるように、マキが結論を教えてくれた。

「カルタ先輩は、吸血種グレルだよ」

グレル。

え、グレル!?

人喰種の亜種。綺麗な顔で人間に近付き、その血を吸うという捕食者。天敵。

ああだからこんなにキレイなんだ。驚きの奥で深く納得してしまった。

「一応、塔内での摂食は禁じられてるし、俺はホントに学びに来てるし、飢えはウィユ研究室で解消して貰ってるから安心して欲しい…処だけど…まあ、無理だよねぇ」

バツが悪そうに目を逸らす。

「いや、別にそれなら全然」

襲う気はなくずっと今まで通りだというのなら。代替食糧が用意されているのなら。問題はな
いように思う。

マキは解っていたように、それでも呆れは隠し切れないというように肩を竦めて見せた。

「ご覧の通りこの子危機感がないんでね。苦しい思いすんのはあんたの方だ、先輩」

「ホントにね。フィアちゃんは、悪いヒトだねえ」

いつか聞いたような台詞をまるで泣きそうな顔をして言うから。

「よしよししてあげましょうか」

「ふふ、要らない」

断られた。



驚きを驚きで上塗りされて少しだけ忘れていた。

ウイユ先生はどうやって『私の構成情報』を手に入れたのか。…どうやっても何も、入手経路なんて二パターンしかない。どちらであつても、なんとなくシヨックだ。

…いや、端から「研究体として」と言われていたじゃないか。

「……ふう」

シャワーを止める。

こういう時は、猫を撫で転がしに行こう。

ふらっと塔内を歩けばいつもならすぐに見つかるのに、今日に限って全然見当たらない。本当に猫というものは思い通りにならないものだ。

「……」

めげてきた。

元々そんなに元氣はなかったし、もう諦めよう。そもそも今日のジユウは猫型じゃない筈だ。そうだ。でっかい男を撫で転がしても元氣にはなれない。なんてことだ。やはり判断力に異常をきたしていたのだ。

会う前に気付けて良かったと踵を返した。

「おっ、フィアだ」

「…おまえ本当…そういうヤツだよな」

「？」

寮のエントランスを過ぎてすぐ。

ジユウは現れた。

「まあいいや。ちょっと部屋寄ってかない？」

「えー、今のフィア楽しくなさそうだし、いい」

気分の落ち込みを感じして避けてくるとか本当猫。

「楽しくないから撫でさせろって言うてんの。ほれ来い」

「や〜〜だ〜」

ずりずりと引き摺って部屋まで持って帰った。

暫く無心に頭をわしわしと撫で回してみたが、やはり違うと思う。

「…猫になれない？」

「ムリかな」

無言で撫で回されてくれていたジユウだが拘束が緩んだ隙について私から距離を取った。

「なんなの突然」

「いや……ちよっと」

これ以上無理強いする気にはなれず、諦めて手を下げる。今は無い筈の尻尾がブンブンと凄いい勢いで振られている画が見える気がした。

「チーズ出すから許せ」

「ミルクもつけてよ」

「……あったかな」

要冷蔵品はあまり常備していない。

冷蔵庫を覗くと、見覚えのないミルク瓶がひとつ入っていた。

「ジュウが入れた？」

「うん。こないだ来た時」

「ああそう」

まあジュウの物なら好きに飲めばいい。しかしチーズとミルクって。いや良いなら良いけど。

「うま！」

「それはよかった」

ぺろりと口元を舐める様を見て、ふと疑問が湧く。あの舌、人型の時もザラザラなんだろうか。「そういえばジュウはさ、どうして塔へ？」

「ん？入学式の時言っただじゃん。金を稼ぎに」

あー、そういえば言ってた。

「でも、なんで塔へ」

お金を稼ぐだけなら他に幾らでも方法はある。確かに塔で専門職に就けば高給取りになれるだろうが、道程が長いし、確実でもない。そういう職に就くにはかなり勉強しないといけないし、競争率もそれなりだろう。

「おれ頭は良いみたいだったから」

「おっしゃる通り」

特待で塔に入るくらいに出来は良い。魔術に関しては。残念ながら働きに出られるほどの社会性が足りない。

「そう。だからそういうのもまとめて学んで来いって」

「なるほどね」

全然鍛えられてないけどどうなのでしょう。

「でもさあ」

くたつと肩を下げて、ジユウはテーブルに顎を乗せた。

「ホーマサスは、嘘が多い」

「…ニアミは嘘吐かないの？」

「吐かない事ないけど、ホーマサスは多い」

疲れる、と欠伸をするように吐き出した。

そうか。能天気にか見えないジユウも不自由に感じる事はあるんだ。

「ジユウは人の嘘が解るの？」

「なんとなくだよ。嘘言ってるな、とか誤魔化してるな、とか」

見抜こうとしなくてもなんとなく解ってしまう。確かにそれじゃ疲れるだろう。人間社会なんて嘘と誤魔化しがいなければ成立しないくらいだ。

「だから、マキとフィアは好きだよ」

「ん。それは褒められているのかどうか」

褒めてるとジユウは言うのでそう言う事にしておく。

でも、そうか。やっぱりマキは裏がないんだ。それにはひどく安心した。

「…ひょっとして、さっき嫌がったのは」

「うーん、だってフィア、なんか誤魔化してた。ああいうのは気持ち悪いからイヤ」

なるほど。ジユウのいう嘘・誤魔化しはなかなか広義のようだ。自分の気持ちや考えを漠然と誤魔化していることも見抜いてしまう。猫怖いな。

そしてそれを感じた上で、ジユウは何も聞いてこない。単に本当に興味がないのかも知れないが。

「ジユウ、やっぱちょっと撫でさせて」

「やゝだよ」

「ああ、ジユウ君は：種族特性も勿論あるが、それを差し引いても観察力が高いからね。ホー
マサスの社会はさぞ生き辛いだろうとは思うが、よくやってる」

ルエイエ先生はジユウをそう評した。

いつもの定期報告。当たり障りなく雑談から始めた。

「訊きたい事があるのでは？」

「——はい」

やっぱりバレバレで、なかなか切り出せない私に先生の方からチャンスくれた。
本当は、訊こうかどうか悩んでいた。出来たら後回しにしたい、そう思っていた。

「クドルの：事を、ウイユ先生から聞きました」

先生は無言で一つ頷く。

「私の構成情報をコピーして魔力を扱えるようにされたって」

「された、というのは君の主観だね。クドル君は全ての危険と可能性について説明を受けた上で、自ら納得して施術を受けたと聞いている」

そんなの。戦時中に戦争に行く兵士みたいなもので。当時の状況下では半強制の『自主的』だろう。

「まあそこは前時代の問題だったとしても、塔として勿論補償は出している。君が引っ掛かっているのはそこではないね」

「私はウイユ先生とはこれまで面識はありませんでした。自分の情報が知らない間知らない人によって武装に用いられてしまったのは…良い気分ではありません」

それはそうだろう、と先生は肯いた。

「それに関しては全面的に謝罪する。申し訳なかった」

「………」

先生は珍しく言い淀み、何度か目を泳がせた。

「…いや。そうだな。真実を」

小さく呟いてから、私と目を合わせた。

「君の育ての親は、塔の出身だね。ウイユ先生とも懇意だった」

父は魔力制御の方法を求めて、私から魔力生成に関する情報をコピーしてウイユ先生に託した。解読と、制御法の研究。それが託された願い。その一環として他者への埋め込みが行われた。当時の塔は、それらが成功したら武装転用する事を条件にその実験に許可を下した。

「僕は就任してからそれを知った。君に伝えるかは悩んだが——伝えなかった。すまない」
それは。つまり。

「私の事を、兵器として見ていたワケではなかった」

「あたりまえだ！」

先生は怒り気味に、ほんの少しだけど、声を荒げた。

「君の育て親だ、どんな人間だったかは君がよく知っているだろう」

そう。そうだけど。

何をしていた人なのかは知らなかったし、今も知らない。

私はジュウみたいに人の嘘を見抜けない。丸々と信じて良いんだろうか。父も先生も、私を兵器利用する気はなかったと？

「君を塔に招いたのは……もう、そういう研究をしなくても良くなったからだ。君の育て親が君を塔に預けなかったのは、かつての塔は君にとって危険があつたからだ」

あの冗談は頂けなかったな、僕は冗談が下手でいけない——と先生は頭を掻いた。

『研究体としても価値があるから』と言っていた事を指してだろうか。半分本気で受け取っていたが、冗談だったのか。

「……よかった」

目の焦点も合わないままポツリと呟いた私に、先生は困った顔をして、もう一度「すまなかつ

た」
と口にした。

「おまえは発想力がない！」

三年目の晩春、スナフ先生は私に人差し指を突き付けてそう言った。

「力量は今や申し分ないが、応用が効かん。このクソつまらん論文は何処にも出せん」

三度めのリジエクトに流石に項垂れる。

知識の必要な科目を避け続けた結果、私の天敵は論文になっていた。因みに去年も八度書き直した。それを考えればまだ三度め。とは言え、去年の轍を活かして頑張ったつもりだっただけにダメージは大きい。

今更研究内容自体を変えるわけにもいかないから、書き方を工夫して凌ぐしかないのだが。

「先生、せめて建設的なアドバイスを……」

「これのか？……主題を変えろ」

「今更!？」

「やってきた結果はそのまま生かせ。論点をすり替えろ。そうだな……『魔力を用いた場合の魔術効果と効率』とかでどうだ」

なるほど。魔力を扱えるのはアドバンテージと取って、確実に他者と競合しない論文にする。

「私が魔力使うのバレちゃうじゃないですか」

「それこそ今更だろうが。最初におまえが暴発した時点で周知の事実だ」

そうだったのか……。

「おまえの使う術にはそれくらいしかオリジナリティがない。イヤなら何か考えろ」

最近はクドルのお陰もあって全く暴発を起こさずに済んでいる。危なげな事があっても、クドルが未然に調整してくれる。クドルの魔力生成に私の情報が使われていた事を謝りに行ったら、それなら、と同調を使った私の魔力調整をしてくれるようになった。本体より扱いが巧いのだから参ってしまう。

「うー。クドルはどんなの書いた？」

『熱系攻性術における威力向上のための一手』

因みにクドルは今年も一発で優を貰っている。出来が良い。

「フィア、文章も下手だけど内容も薄いから。先生のアドバイス有用だと思う」

淡々と酷評してくる。

「ぐぬぬ」

「魔力を持つてる事、知られたくないのはどうして？」

「それは――」

確かに、考えてみればもう隠す理由はそんなにない。塔の人たちは良くも悪くも他人には無関心で、自分の知る事実に重きを置くから噂にも踊らされにくい。私の暴発も、クドルや先生たち、対処出来る人が何人もいる。でも

『あまり公言しない方がいい』

「……………ちよつと、相談してみる」

「おや、貴方は…」

学長室の扉の前には、講師が二名立っていた。

ひとりとは術史学の先生。もうひとは、授業を受けたことはないがよくルエイエ先生と一緒にいるので顔は知っていた。

「フィアくん、だったわね。学長に用？」

「では我々は後にしましょうか」

「あつ、いえ！ちよつとした相談で大した用事では——出直します！」

タイミングが悪かった。逃げるように引き返す。

なんとなく、ウイユ先生の所為…というわけでもないけれど、ルエイエ先生と私の関係性を知っている先生には少し警戒してしまう。無駄に失望されたくもないし。

「待ちなさい」

呼び止められてビクッと立ち止まる。

「我々も急ぎの用ではないし、お先にどうぞ。君が訪ねて来ていたのを帰したと知られれば、学長が拗ねてしまうからね」

冗談めかした台詞に呆気にとられる。学長が…拗ねる??似つかわしくない表現だ。しかしそこまで言つて先を譲ろうというのならこれ以上は断り難い。

「……すみません。それでは」

笑顔で背を向けるふたりに頭を下げ、扉をノックした。

学長に論文の…というか、魔力の公表について相談すると、あっさりと許可が降りた。

「君の事だ、君の思うようにしなさい。相談してくれた事は嬉しく思うよ」

「は、はい…」

「ただ、やはり魔力を持った人間は希少だからね。公にする事で、変に近寄ってくる者も居ないとは限らない。十分に気を付けて欲しい」

先生はどこかそわそわしている。

「先生？」

声を掛けると、暫し押し黙ってから、思い切った様子で口を開いた。

「僕が君の後見人だという事も同時に公表してはダメだろうか。いや、君の迷惑になりかねないとは承知なんだが！」

目が点になる。

いやそれは。正直魔力を持っている事よりも変な虫が寄ってきそうなのだが。

「…そうか？…そうか…」

ああ、しょんぼりさせてしまった…！

私がアワアワとたじろいでいる間に持ち直した先生は少しだけ口を尖らせて弁明をした。

「クドルくんが平和に学生生活を送れているのはナナプトナフト先生が目をはっきりさせてくれたからというのもあってね。僕も君を守れればと思ったんだが」
拗ねている。

「先生。先生には既にとってもよくしていただいています。なのに関係を隠すようなマネは本当に申し訳ないのですが…ないのですが！先生の名に恥じない生徒にはなれそうもありません…お互いの為にも、すみませんが…」

「君がそういうのなら、無理強いは出来ないな。ただ、僕に迷惑にはならないよ。そこは否定させてもらう」

頭が下がる。

「仕方ない。処で君、ナナプトナフト先生の研究室に入るのかい？」

「え？」

そういえば楽しくてずっと特別授業を継続しているが、考え有ったの事ではなかった。

「あれ？だって論文も書いているんだらう？」

おっと？

「彼の研究の手伝いもしていると聞いているよ」

そういえば偶にさせられている。

「であれば、先生にはフィア君の保護も頼もうと思うんだが」
どうやらいつの間にか囲い込まれていたようだ。

楽しいから、いいと言えればいいのだが。

これは流石に、流されすぎているのではないだろうか？

「あんた、本当に論文書くの下手だな」

「うぐ」

主題を変えて書き直した論文を読み終えたマキは盛大に溜め息を吐いて顔を上げた。

適切にアドバイスを貰いながら修筆していく。ほぼほぼ全直しの勢いだが、修正点以外への反応がない。

「…マキちゃん」

「何」

「驚きとか、ない？」

「構成の下手くそさには十分驚いてるけど」

ぐぬぬ。告白ついでの校正依頼だったのに、内容に関する反応が無さすぎる。

「魔力持ちは希少らしいんだけど」

「知ってるけど。——ああ、隠してたんだっけ？」

バレバレだった、ということらしい。何でも知ってるなコイツ。なんか悔しい。

「隠してたよ！だから謝ろうと思って！ごめんなさいね！」

キレ気味に謝ると、マキは心底怪訝な表情をした。

「謝られる意味が解らない」

「なんか騙してみたいない気持ちがあるからだよ、こっちがスッキリするの！」

「あっそう」

納得したのか諦めたのか、マキはそれ以上突っ込んでこなかった。

「そーいや、スナフの研究室に入るんだって？」

「——だから、なんでそういうの知ってんの？」

この人付き合い皆無そうな研究者が、どうしてこうも耳敏いのか。

「別に、ちょっと聞いてりゃ色々入ってくる。皆場所も弁えず好き勝手話してるだろ」

地獄耳なの？こわ。

「てっきり幻術の方に進むかと思ってた」

「あーうん、何にも考えてなかったんだけど、なし崩し的に…流れで」

マキちゃんの座った目が怖い。

視線を外したまましていると、論文を読み終えた時よりも更に大きな、長あい溜め息を吐かれた。「いや、うん、今回は。今回は流石に私もどうかと思った。でもなんか、外堀が埋まって。

考えてみれば強固に抵抗するほど嫌ではないかな、って…」

スナフ先生は結構傍若無人の我儘ブーだけど、嫌いではない。意外と好きだ。研究内容は熱系攻性術だけど、理論上の大術を追い求めるもので実践的に人を傷付けるタイプではない。…というの、キレイゴトではあるが。でもまあ、お手伝いも楽しいし、熱心に研究する様は応援したくなる。

「スナフがロマン主義なのは解ってる。それで『置いていかれた』んだからな。でも、あんたはその研究手伝ってどうする気なの。研究者になんの？」

研究者になりたいのかと言われると、どうだろう。先生みたいに熱心に打ち込める研究に出会えるかどうか。取り敢えず今はそんなものはない。そもそも論文もまともに書けない身で研究者は難しい気がする。

「幻術で気儘に食べていくってのも、悪くない夢ではあったけど」

「それも利根的だけど、あんたにはそっちの方が似合ってる気はする。今なら遅くないんじゃないの」

そんなに反対されるとは思ってなかった。

これはどうしたものか。

「おいフィア、学長とどういいう話をしたんだ！」

顔を見るなり、スナフ先生は食ってかかってきた。

「え？ どういうって…言われても」

「むちゃくちゃ絡まれたぞ」

ナニソレ見たい。

しかし、もうルエイエ先生からスナフ先生へ話が回ってしまったのか。これは断り難くなった。

「それで、論文は出来たのか？」

「あ。はい！」

マキちゃんに改稿を喰らいまくった渾身の一冊を差し出す。これでダメなら打つ手はない。

「……ふん。まあ可だな」

「やった……！」

「可で喜ぶな！ そもそもおまえ、コレ殆ど他人に書かせてるだろう」

「アドバイスを貰っただけです！」

何か言いたそうに睨まれたが、胸を張り通す。自分で書いたもん。

「まあいい。だが、そいつは一生おまえの面倒をみてるワケじゃないぞ」

そりゃあそうだ。いつまでも頼ってはいられない。それは、解っている。

「勿論ぼくもだ」

「えっ」

「えってなんだ。もう上級の範囲も教え終わってる。なんとか論文も仕上げられた。ぼくからの授業はこの辺でおしまいだ」

空いた口が塞がらない。修了？

「これ以上は研究の域だ。おまえ、ぼくの研究に興味あるのか？ ないだろ」

「え、だって、手伝ったりしたのに」

ここで突き放されるとは思ってたなかった。なんか寂しい。

「なんだ、うちに来るつもりだったのか？ やめとけ、向いてないぞ」

猫の手でしかなかったなんて！

望まれているなんて傲慢だった。寂しい以上に、凄く恥ずかしい！！

「言っておくが、おまえは攻性術士としては破格だ。その途に進む気があるなら就職先を斡旋してやる。だが、性格的に恐らく実戦は向かん。考えておけ」

「…と、いうことで。振り出しに戻りました」

マキは何とも言えない可哀想なものを見る目を向けた後、

「良かったじゃん」

と私の肩を叩いた。

「良かったのかよくわかんない！ 悔しいような恥ずかしいような寂しいような全部なんだけど！」

まあまあ、とおざなりに慰められる。と思ったら。

「塔に来る人間は、大概なんらかやりたい事があって、それを満たす為に必死で勉強して入学してくるんだ。アンタはなんの為に此処へ来たんだ？」

唐突に人の弱点を責め立ててきた。

例えば就職する為。研究する為。単に、知識欲を満たし続ける為。私には見つからない『やりたい事』を皆持つてる。

ああ、でも。「なんの為に」と問うならば。自分の意思ではなかったが、私にも入学した目的があった。

「……魔力を制御するため」

「そうなんだ。それはまだ達成されてないの？」

「……凡そ、出来てる」

「であれば、他に目標がないんなら、無理に居続けなくてもいいんじゃないの」

塔は魔術師養成所だが、卒業は必須ではない。在籍し続けるのも、就職先を見つけて籍を外すのも個々の自由だ。というか半数以上、殆どが卒業はしない。卒業試験は大変な難関で、そう証書は貰えないのだ。

「別に無意味に居続けるなら辞めろとかそういう事を言ってるんじゃないから。そういう道もあるって、考えた事なさそうだなと思って」

「…見限られたかと思っただ…」

「ごめん」

わざとらしく作られたすまなそうな表情に頬を膨らませつつ、ふと尋ねる。

「そういうマキちゃんは、何がしたくて入ってきたの？」

「訊くような事じゃなくない？ 錬金術を本格的に学ぶ為。知識欲を満たす為」

マキちゃんは初めから目的がはっきりしていた。迷いなく錬金術を学ぶ道を邁進している。羨ましい。

「なんだかんだ言ったけど。何に急かされているわけでもなし。もっと気軽に悩んだら？」

「……そうだね」

やりたい事：だけじゃなく。やるべき事についても考えないといけなかったんだ。

「クドル、ちょっと来い。…おまえも一緒か。まあいい」

スナフ先生に呼び出されたクドルにくつついて、研究室にお邪魔した。先生は研究室の奥の個室までずんずん進んでいく。どうにも機嫌が悪そうだ。クドルと目を合わせる。ふたりとも特に機嫌を損ねるような事をした覚えはなかった。

どかっと椅子に腰を降ろした先生は珍しく神妙な顔をして、机上の書類をクドルに差し出した。

「おまえ宛だ」

「手紙…？」

立派な封筒に焼き付けられているのは。

「国章……！」

「どう答えるかはおまえ次第だ」

恐る恐る手紙とクドルを覗き込む。

「なんて……？」

「……治安維持部隊からのスカウト」

書面から目を離さず返された答え。自分でも頭に血が上っていくのが分かった。

「行くわけないだろ！元々あっちが切り捨てたのに！」

「……決めるのはクドルだ」

いつもなら一番激昂しそうなのに、先生は反対しない。難しい顔をして、余計な事を言っしまわれないように我慢している。

「考えさせてください」

クドルはいつも通りの全く考えが読めない表情で淡々とそう言った。

「そうしろ」

これ以上言う事は無いと、先生は手を振って退室を促した。

私も何も言えないまま……それでもクドルの後を追った。

国からのスカウトだなんて、聞こえはいいし、実際凄いことだけど。

相手はクドルを捨てた奴らだ。

塔の方針転換に伴い、前学長と共に塔を去った攻性術士たちからなる軍属部隊。それが、宰相の私兵とも揶揄される『治安維持部隊』だ。名称の割に、何をしているのか判然としていない。「フィアは反対なの？ 待遇はいいし、今は戦時下でもない。そこまで危険な職でもないと思う」

当の本人は小首を傾げて「何が不満なのか」と不思議そうにしている。

「いや、だって…！ だって…」

私が口を出すべきことではない。先生だって我慢してた。こんだけ強くなったぞざまあしろ、と胸を張ってスカウトに乗るのもいいのかも知れない。

でもなんか、凄く悔しい。結局良い様に利用されている気がしてしまう。今更だろとか。美味しいトコ取りじゃないかとか。

「なんで、本当今更…」

思わず漏らすと、クドルはまた不思議そうにした。

「攻性術成績トップだし、他の授業の成績も大体上位だし、自分は覚えていないけど面識もあるなら不思議じゃないと思う。以前自分が育ててたものが使える程育ったのなら手元に戻そうというのも道理では？」

「じゃあ感情論抜きに冷静に考えて、使い難いからポイしたものが他人の手で便利に作り変えられてたからってまた欲しがる奴が、その道具を大切に扱うと思う？メンテが出来ない奴は道具を使う資格はないんだよっ」

クドルは三度瞬きして

「なるほど」

酷く納得した様子で頷いた。

「……ごめん。私が狂わしたクドルの人生だ。また私の所為で歪ませるわけにはいかない。今度こそ自分の考えで進んで……」

「違うと思う」

「え？」

クドルは真面目な顔で目を合わせてきた。

「フィアはそれぞれと気にしてるけど、多分自分はその時も自分で選んだんだ。狂ってなんてない、選んだ結果の現在だ」

それに――、と言いかけてクドルは口を噤んだ。

「？」

何か理解できないものを見つけたように。何度も首を傾げた。

「クドル？」

「あ、うん。それに、自分の何割かはフィアと同じもので出来てると思うと——むず痒い。けど。この感覚は、違う道を選んでいたら得られなかっただろうから」

とても、大切だと。瞳を閉じて囁くクドルの表情は。

「クドル」

「？」

ぎゅっと両手でクドルの顔を挟む。

「??」

「クドル、笑った…初めて見た！」

「??」

全開の笑顔ではないけれど。優しく微笑んだその表情は感情の発露だと思う。

「フィア。明日、先生に答えを言いに行く。ついて来て」

「…うん。どうあれ、クドルの考える未来を聞かせて」

「熟考の結果、今回の話は断ります」

「……理由を聞かせろ」

先生は今日もやはり不機嫌だ。

「やるべき事とやりたい事の量の差です」

先ずクドル本人は地位や名誉や財産への欲がない。攻性術の実戦、最前線には興味があるが、言ってしまえばそれだけである。

「それに、『道具のメンテナンスが出来ない者にそれを扱う資格はない』。その通りで、公的な待遇は良くても、内部での扱いはあまり良くないだろう事は想像に難くありません」
それ、本当に響いてたんだなとちよっと体温が増した。

先生はジト…と睨むようにクドルを見たまま。

「本当に、それでいいんだな」

クドルは迷いなく肯いた。

「それに。自分が居なくなったら、誰が先生の面倒みるんですか」

先生は暫し目を見開いて、苦々しく言った。

「それは理由に入ってないだろうな」

「いくつかの『やりたい事』のひとつです」

しれっと答えるクドルに私も思わず目を向ける。

「おまえが冗談も言えるようになったらと思っておく！では断りの返事を書くぞ。後悔しても遅いから！」

シッシと退室を促す先生を見るクドルの表情は、柔らかな笑顔だった。

「で、おまえは……ああ、進路を決めたか？」

「いえ。でも就職先はまだいいです」

クドルだけ先に退室して貰って、私は残った。

「そうか」

「先生、ほっとしました？」

先生は嫌そうに顔をしかめたが、溜め息とともに肯いた。

「まあ、正直な」

ガリガリと髪を乱すように頭を搔く。

「あいつは最近偶に笑うようになった」

「はい。吃驚しました」

凄く優しく微笑むのだ。あれは心臓に悪い。

「このタイミングでスカウトだなんて、握り潰してやろうかと思った」

スナフ先生にしては、本当によく我慢したなと思う。

「なんにしろ、あいつが笑うようになったのはおまえの影響なんだろう。……おまえ、幾つだ？」

「？もうすぐ十九ですね」

ふーんと洩らして

「あの通り欲のないヤツだが、結婚するなら歓迎してやるぞ」

「」

何を言い出した。

「将来の展望が無いんだろ。どうしようもなくなったらクドルに飼って貰え」
そういう意味での結婚はお断りします。



「スナフ先生に縁談持ちかけられました」

笑い話のつもりでそれを伝えると、ルエイエ先生は笑顔を保ったまま数拍黙って、

「それは：ナナプトナフト先生と？ 君の？」

「違いますよ！ 進路に困ったらクドルに面倒見て貰えって」

「ああ良かった。処分しないといけないのかと思ったよ」

え。コワイ。ルエイエ先生が凄い怖い笑顔だった。

「…冗談だとも」

ガクブルする私に気付くと、ぷくつと頬を膨らませた。一転カワイイ。

「クドル君は国の誘いを断ったそうだね。彼なら行くかと思っていたが」

「最初は行こうとしてましたけど。考えを改めてくれてよかったです」

先生は私を見て「ふむ」と洩らした。

「生涯のパートナーを決めるにはまだ少し早いのではとも思うが、本気なのなら止めはしないよ」

「え。先生、私もクドルもそんな気ないです」

「そうか。まあそういう話になった時は、僕にも報告してくれ」

はあ、と深く息を吐き出しながらテーブルにつく。

休憩室のお茶は日替わりで置いてあるものが違う。今日のはリラックス効果のあるハーブティーだった。吐き出した分、良い香りを吸い込む。

将来ややりたい事についてずっと悩んではいるものの、最初から揺るぎなくひとつ決まっている事がある。私の人生には、結婚する予定は入っていない。

「悩み事？」

「進路について」

「ふふ、フィアちゃんが悩んでる時はいつもそれだね」

当然のように正面に座って、私の手を取る。

「そんなに決まらないなら、フィアちゃん、俺のパートナーにならない？」

「先輩ですか」

「も？」

思わずまた溜め息が漏れる。

「求めて貰えるのは嬉しいですけど……」

「いや待って。もって言ったでしょ今。何？聞かせて？」

「聞かないで下さい」

「えー」

先輩はテーブルに突っ伏して、上目遣いで此方を見ってくる。

「…俺たちはさ」

ポツリと、ギリギリ聞き取れるくらいの声量で先輩は話始めた。思わず耳を寄せる。

「肉喰いと違って、元々人を殺さなくても生きていけるんだ。死なない程度に血を分けて貰えれば。でも、相性のいい『伴侶』を見付けたら、もっと少量で生きてけるんだよ」

そう言うと、先輩は突然表情をイタズラな笑みに変えた。

「ちょっと味見させてみない？」

「禁じられてるって言ってませんでした？」

呆れて顔を離す。

「無節操に誘ったりしてないよ。伴侶になれたらいいなあと思うのは、フィアちゃんだけ」

またそういうことを言う…。

「本気なんだけどな。…運命の相手を見付けられなかったらさ、一生あの研究室のお世話にならなきゃいけない」

「そう言えば、どういう経緯であの研究室に？」

「あつ。ちょっとは俺に興味でた？ 嬉しいね」

別に今までも興味がなかったわけじゃない。誰へでも、自分から話してくれる以上の事へ踏み込むのは気を付けているだけだ。

「言いたくない話ならいいですよ」

「ふふ。プロポーズした相手に、そうそう隠し事はしないよ」
につこり笑って頭を起こす。

「でも、あんまり聞いて楽しい話じゃないのは申し訳ないかな」

冬の、寒い日だった。

北国の山地であるワーナーの冬は厳しく、多くの人は本格的な冬が来る前に入念な準備をして冬籠りをする。

それで『食糧』が足りなかったのか。母は街中で狂化して、二人ほど喰い殺した。干物のようになつた死体の顔を今でもよく憶えている。

流石は塔の下街で、直ぐに塔から魔術師が下りてきた。一瞬で母は『駆除』されて、共に居た子も処分されるところだった。

「だけど、他の魔術師たちや役人を言い包めて助けてくれた人が居てね。それがウイユ先生」
だから彼は恩人で、最初から自分がどういう生き物か解つた上で適切に接してくれる理解者で、人間社会での生き方を教えてくれる師だと言う。

「あの人癖が強くて胡散臭いから敵多いけど、オレにとってはいいい先生だよ」

「でも、逃げたいの？」

その問いに先輩は暫し唸る。

「逃げたい、というのは語弊があるけど……ずーっとお世話になりっぱなしなのはやっぱりちょっとイヤかな。意に反しない形で親離れはしておきたいね」

そこで私か。

「先輩ひょっとして、魔力も食べれる？」

「そう、多分だけだね。察がいいね」

直接血を吸わなくても、触れるだけで魔力が流れる。それを少しだけ糧に出来る。なるほど。執拗に口説かれていたワケだ。魔力持ちは希少で、そうそう出会えない。これを逃す手はない。「フィアちゃんと会ってから、食事のペースが延びたから。ひょっとしたらと思って」

「だから味見したいと」

「そうそう」

考える。

「ねえ先輩。恩人だなんて言うけど——ううん、いいや。はい」

「え？」

差し出された腕を見て先輩は間の抜けた声を上げた。

「殺さないでね」

「……………フィアちゃん、君本当に…」

呆然と洩らした後、覚悟を決めたように笑みを作って見せた。

「傷付けたりしないよ」

手首の内側に唇を押し付けられる。そこから血管に沿うように上がっていく。妙な気恥ずかしさと、温かな感触と——ゾッ、と。何かが奪われる感覚。

時間にして僅か数秒。先輩は唇を離すと、ペロリと舐めた。

「ああ本当に——血を吸わなくてもいいんだ…」

「…先輩、結構持っていましたね…？」

恍惚とする先輩とは対照的に、私はグツタリしている。

「ごめんね、実は生体相手は初めてで…加減を間違えちゃったかな…」

ごちそうさま、美味しかったよと優しく微笑む。

「…大丈夫？ 貰いすぎちゃったかな」

確かに一授業終えた時よりも疲れた感じがあるが、それくらいだ。実際血を抜かれたわけじゃないし、痛くもない。

「…この程度なら、頻繁じゃなければ…まあ」

「ふふ。様子を見ないと解らないけど、この感じならひと月くらいは保ちそうだと思うなあ」
なんて燃費のいい！

「これで俺は完全にフィアちゃん一筋なんだけど、どうする？」

「どうするも何も。意外と腹保ち悪いかも知れませんが。様子を見ましょう」

「そっか。ふふ。ありがとう、フィアちゃん」

さて。これは…。

誰にも相談しない方がいいように思うが、此処は休憩室。たぶんアイツは、もう知ってるんだろうな。

疲れたしとちょっと昼寝をしてみたら、気付けば一日が終わっていた。

「……今日午後の授業無くてよかった」

日が落ちてしまっていた事は仕方がないので、潔く諦めてうーんと伸びをする。

なんだか凄く、スッキリしている。過去にないほど快調だ。特に体内を通う魔力が素晴らしく新鮮な透明度で――

「……あ、ひよつとして」

今回の『献血』で大量の魔力を消費した事により、身体には新たな魔力が満ちているようだ。以前にクドルが言っていた大暴走を起こしてみた方がいいのではという説や窮屈そうだという表現が思い出される。なるほど。定期的に抜いて貰うのは私にとってもプラスかも知れない。先輩は加減を間違えて摂り過ぎたと言っていたけど、スッキリするためにはこのくらいが良さそうだ。

需要と供給が一致した。これは最早断る理由がない。

一連の発見をルエイエ先生に報告する。

先生は複雑な表情で聞いていたが、説明を終えるとひとつ頷いた。

「なるほど。見誤っていた。君は僕たちとは違う」

洩らされたその言葉に、そつと心臓が冷えた。

「きつと生成される魔力量がとても多いんだろう。魔力消費を抑えるような扱い方を教えてしまったのは誤りだったな。すまない」

「えっあ、いえ！そんな……」

線を引かれてしまったかと思ったが、受け取り間違いだったようだ。

「クドル君は問題ないようだから、やはり複製機能と原本とでは出力差もあるのかな」

「えっと……」

「ああそれとも、最後の暴発で生成機能を一部壊して生成量を身体に合わせて落としたのかも知れない」

「あの……」

ぶつぶつと呟き続ける先生におずおずと声を掛ける。

「ああすまない、思考に夢中になってしまった」

先生は視線を私に戻した。

「カルタ君だね。うん、魔力を糧に出来るとは。人喰種の内でも、吸血種は玄獣に近い存在なのかも知れないな」

玄獣。玄力を扱う獣。生物というよりはエネルギー体に近く、未だ多くは解明されていない存在だ。

「君も大概そっち寄りかも知れないが」

玄力を扱う獣だから玄獣。ならおまえらは魔人だな——なんて言っていたのはスナフ先生だったか。

「玄獣も、繁殖しない個体程力が強かったりするからね」

ああなるほど。唯一個体。例えば各国の守護獣なんかは個体名が種族名だ。同じ形、同じ性質の個体は他に居ない。対してコールドやドレイクは群れをなす程数がいる上、近似種も多い。個体として比べればどちらが強いかは明確だ。

「ギブアンドテイクの関係を構築するのは悪いことじゃない。君たちが決めた事であればそれでいいさ。ただ、まあ……前例の少ない事例だ。何が起こるか解らない。充分気を付けるように」

こちらから話を振らないからだとは思うが、マキは例の件に関して何も言っていない。今まで感じから言って絶対耳には入っていると思うけど。

「マキはさあ、学びたい事学び終わったらどうする？」

「塔下街に店開く」

「え!？」

即答すぎてビビる。

「店って？」

のんびりとジユウが尋ねる。こうして三人でマキの部屋でだらだらするのも実は久し振りだ。

「小料理屋か、バー」

がぼつとジユウが体を起こして目を輝かせる。

「すげーいいじゃんそれ！肉！おれあの肉がいい！」

「いやまあ出すとは思うけど、気が早い」

小料理屋は凄くイメージ湧くけど、バーか。そういえばマキは最近偶に酒も造ってる。こないだはこの部屋でワイン様のモノを造っていた。錬金術師なので蒸留酒もお手の物だ。

「うーん、でも料理メインの方がいいと思うな」

「店出す頃迄には技術も身に付いてる筈だから」

ワイン様のモノはあくまでワイン様のモノで、ワインと言うには少し厳しかった。まあ部屋で造ろうというのがそもそも難しい。

「まあ実際、本当に酒造って提供しようと思ったら色々要るし…免許とか手続きとか。ちよつと面倒臭い」

色々考えて調べてるんだなあと感心する。

「その頃にまだやる事なさそうだったら雇ってあげてもいい」

「うわ…お願いするかも知れない…」

だってそれは、凄く楽しそうだ。

「つて！今まで考えた中で一番想像し易くて且つ楽しそうでした」

先輩はいつも通りニコニコと話を聞いてくれていたが、ちよつとだけ困った顔をして言った。

「それは、俺はフラれてるのかな…？」

「あ、先輩も一緒ですよ。先輩と私の需要と供給は一致したので」

「…うん、話を聞こうかフィアちゃん。ちよつと伝わってこない」

先生に話して本人に話していなかったという事実に気付いて慌てて説明する。

「つまり——、食事は提供してくれるけど、それ以上ではない——と？」

「それ以上って…だって、食料としてしか私に興味ないでしょ、先輩」

先輩は一瞬目を見開いて、すぐにちよつと怒ったような表情を作った。

「…どうして？」

「どうして、つて…」

どう見ても『そう』だからだ。

最初から何かずつとあった違和感は、正体を知って暫く観察していたら氷解した。

先輩は私に限らず全てのヒトと一線を引いている。『恩人』と呼ぶ先生にすら。根本的に違う

生物だと、先輩の方から線を引いている。見た目はニアミよりもずっと人間に近いのに、中身はきつと遥かに人間から遠いのだろう。

『演技が下手だ』って、ウイユ先生に偶に言われるんだ。そういう事だったのかな。…怖い？」
「怖くはないですよ」

それを本人も何処かで理解しつつも、先輩は人間であろうとするから。

「あとなんとなく勘違いされていそうですけど、私先輩の事好きですからね。だから、一緒にいましょう」

先輩は額を抑えて天を仰ぐ。溜め込んだ息を吐き出すように、深く低く呟いた。

「フィアちゃん…信じて貰えそうにないけど、俺も君の事、すごく好きだよ…」
「そういうことにおきます」

色んな答えは結局出なくて、全て先延ばしにしまっている。

ラベゼリンに突き付ける答えは見付からないままだけど、わくわく出来る未来を見つけた。きつとすぐにまた同じ様な事をグルグル悩み始めて、堂々巡りは続くんだろうけど、今はこれでもいいかなと思えた。



【フィア】

無性別として生まれた、遠く有翼種の血を引く子。実の両親は頻繁に魔力暴発を起こすフィアの所為で村に居られなくなり、無理心中を図った。が、生き残ったフィアは塔所属の魔術師…ルエイエの叔父に拾われ育てられた。



【ジュウ】

種族は獣血種、ニアミ。他人の心の動きに敏感で、誰にでも(気が向けば)愛想は良いが、誰にも本心は明かさない。たくさんいる兄弟や同朋の為に人間社会で金を稼いで仕送りしている。



【マキ】

塔下街に生まれ塔下街で育った生粋の魔術師。顔が広く、望んで動けばあらゆる情報を手にする事が出来る程。年齢不相応の貫禄も一役買っている。単純な知識欲が彼の根幹故、一頻鍊金を修めた後は本当に塔下に店を出した。



【カルタ】

人喰種の亜種、吸血種の青年。過去に塔下街で母親が人を吸い殺す事件を起こし、塔で保護された。以来ずっと輸血と疑似血液で生きているので、直接人から血を吸った事はない。

【ルエイエ】

母親である前学長を塔から追い出し、新体制を成立させた新時代の象徴。遠くに有翼種の血を引く魔力持ち。フィアの心の強さを快く思い、そのままでいて欲しいと裏から色々手を回している。かなりの過保護。



【ラベゼリン】

魔力とは何かを知る、作中唯一の存在。フィアの中に遥か昔に懇意にしていた者の面影を見ている。魔力と自身の存在との相性が悪い為複雑だが、魔力を扱う者にはつい好意を抱いてしまうのが悩み。



【クドル】

フィアの魔力生成に関する情報を埋め込まれた人工的魔力持ち。移植初期の何度かの暴発で記憶と感情が消失した。フィアと関わる内に少しずつ感情が芽生えてきた。





【ケミオ】

占術学講師。種族は眠鬼。フィアには特別授業で瞑想を教えてくれた。穏やかだが、逆らえない圧がある。



【スナフ】

攻性術学講師。熱系攻性術の研究者。実践より理論を重視するロマン主義。クドルの保護者でもある。ウイユとは学生時代からの仲で腐れ縁。



【ウイユ】

呪学講師。生体錬金術の研究者。癖の強い人物だが現学長に心酔しており、従順。倫理感が少し壊れている。トビオカ先生の事も大好き。

愚者の日にパーティーでプレゼント交換会をしました

- ・e.50程度のプレゼントを用意する
- ・皆のプレゼントをシャッフルしてランダムに配る











【ウイユとトビーとスナフ】





たぶん一緒に働いてる。





事後。



ぼくの艶姿を
眺めておいて
無反応とは
どういう事だ！

枯れてるのか
おまえ

いきなり他人の
局部を驚掴むのは
やめたまえ

君は何を求めて
いるのかね















Kate Kanayama

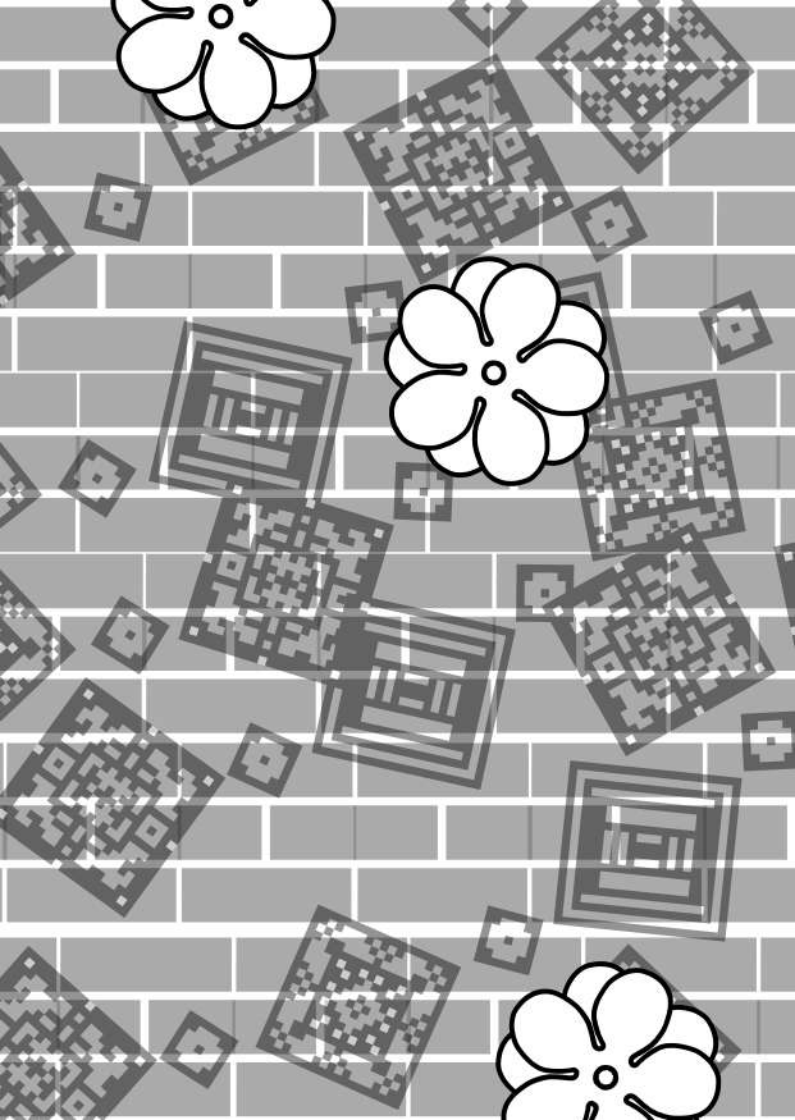
2021.10

*the
tower
of
Cochma*

コクマの塔
の塔の魔女

加名山炯斗





【塔の魔女】

あれはいつだったか。そう、確か四年ほど前。

父に連れられて出向いた伯父の家で、彼に出会った。伯父に引き取られたという十二歳の少年は、当時五歳の僕に満面の笑顔を向けてくれた。追いつけっこや虫取り、川遊び。色んな遊びに誘ってくれた。そういった遊びに慣れていなかった僕にはどれも新鮮でとても楽しく感じたのを覚えている。

とても明るくて素直な人だった。災難を経験した筈なのに、と。僕はその強さに敬意を抱いていた。

彼は魔力を持っていて、扱いきれずによく暴走させていた。伯父も魔術師だったから軽度の暴走はなんとか出来たが、偶に手に負えない時は僕が呼ばれた。父にも彼に魔力の扱い方を教えてやれと言われたが、当時の僕にはまだ巧く教えられず暴走を収めるので手一杯だった。

彼のためになりたいという気持ちもあつて、僕は必死で勉強した。解りやすい教え方。伝え方。そうこうしている内に時代が変わり、僕は塔の代表となり、父は塔を下り、伯父が亡くなった。僕は彼を塔に招き、その後見人を務めることにした。

あつという間に魔力の制御も修得して、フィアは強力な魔術師として成長しつつある。初めの頃こそ慣れない環境や勉強に遅れをとらないようにと必死だったが、努力は着実に実を結んでいる。教え子の成長はそれだけで嬉しいものだが、力を付けてきたフィアは僕の手伝いがしたいと申し出てくれた。感無量だ。今ではまるで秘書のように働いてくれるのがどうにも申し訳なくあるのだが。

「先生、何見てるんですか？…図面？」

いつものように僕が散らかした書類や資料を片付けてくれていたフィアが背後から覗き込んでいた。

「ああ。塔の改築記録だよ」

塔は何度も増改築を繰り返しており、内部構造はかなり複雑化している。この広大で複雑な迷宮には僕が把握できてない箇所も多量にある。

隠し部屋、というヤツだ。

「ロマンですね…！」

フィアは瞳を輝かす。

「だろう？」

塔の何処かには聖霊の残した隠し部屋がある——というのが、長年語り継がれてきた伝説だ。昔、母もそれを探していた事は知っている。あの母が探してみるくらいだからただの噂ということはないだろう。

図面の中から僅かに違和感のある箇所を幾つか見繕う。

「片っ端から調べてみよう。付き合ってくれるかい？」

「勿論です！」

目星を付けたのは十数ヶ所。その内幾つかの場所には難解な魔術的仕掛けも備わっていて期待したが、結局はただの小部屋だった。中には部屋とは言えないような空洞なんかもあったりした。

「うーん、実は無いんですかねえ聖霊の隠し部屋なんて」

「どうかな。まだ見付けられていないというだけかも知れない」

無を証明するのは有を証明するよりも難しいのだから、無いと結論付けるのは尚早だ。

「そうですね！きつとあると思った方が楽しいし」

「そうだと。まあちよつと間を置いて、また探してみよう」

時を置くのは重要だ。無意識に固まってしまっている思考の方向性がリセット出来る。

そういうば、母はある時からパタツと隠し部屋を探さなくなった。世情が忙しくなり諦めたのかとも思っていたが、あれは恐らく見付けたのだ。母が見付けたのであれば、僕も見付けなくてはならない。あの人に負けることは許されないのだから。

そしてある日。

「先生、先生！隠し部屋見付けたかも！」

興奮気味に飛び込んできたフィアの言葉に思わず身を乗り出して応える。

マキ君、ジユウ君と共に探していたらしい。優秀な三人は知恵を合わせて、僕に勝まさつたのだ。なんて喜ばしい事だろう。

早速向かってみると、それは塔の中腹、商店街層のど真ん中——人で溢れ返る街中に在った。巧妙に隠された扉を開くとまるで異界に続くような通路が現れた。パズルのような仕掛けが数多あり、扉を潜る毎に難易度が上がっていく。フィアたちも、挑戦はしてみたが途中でギブアップしたらしい。負けていられないと僕も気合を入れて挑んだのだが。

「これは……解けない」

呆然とした。何を求められているかは解る。解るのだが、今の僕では実力が足りない。僕の力では未だ叶わない。この感覚はいつ以来だろう。フィアに巧く教えられなかった時。傷付ける

覚悟で放った魔術を母に散らされた時。出て行く父を引き留められなかった時。

「先生……」

傍らのフィアが目を丸くして僕を見ている。

「嬉しそうですね？」

「ああ。挑戦し甲斐のある難問に出会えたのはとても嬉しい。とても楽しい」
自己研鑽の為の解り易い目標があるのはとても良い。

僕もまだまだだと再認識出来たところで、この隠し扉の事は暫し先延ばしにする事にする。

「なに、僕だって成長期だ。あつという間に再挑戦の日はやってくるさ」

「その時は是非ご一緒させて下さいね！楽しみに待ってますから」

それは僕も楽しみだ。フィアに負けないように、より一層励むとしよう。

たった一年でフィアは益々成長して、僕の研究の補助をお願い出来るようになった。

「念の為もう一度言っておくと、僕の研究内容は公表していない。君も秘しておいて欲しい」とはいえ、公然の秘密だけだね」

フィアはこくりとひとつ肯く。

僕の挑んでいる主題はターミナルだ。各国にひとつずつ置かれた転送装置。記録によれば建国の際に設置されたところから、凡そ八百年前から存在する現役のアーティファクトだ。設置された時代以外の情報は残されておらず、経緯も目的も謎なまま各国移動手段として長年利用され続けている。マルクト以外のターミナルはどれも一見変哲のない石碑で、外観は其々少しづつ異なっている。いずれも起動時は青みがかった光を放つ。ああ、ゲブラーのターミナルは見たことがないし資料もないから解らない。

転送原理もよく解っていない。利用には存在登録が必要で、これを行ったターミナル間でのみ転送が可能となる。つまり行ったことのない場所への転送は出来ない。ただ存在登録済みのターミナルなら荷を送る事は可能なので、一度誰かに荷として送って貰えば解決できる。僕はゲブラー以外のターミナルはその手段で登録済みだ。

ともかく。

現状の調査結果としては、ダートに於いて励起竜脈と呼ばれる場所に在ること、どうやらそれぞれが『端末』でしかないようだということが解っている。

コクマ国のターミナルは塔の一階にあり、僕が足繁く通っているため自然と何をしているかある程度バレてしまっていると思う。ネットアクでは国防の観点からターミナルの転送機能自体を封じているというが、我が国では制限を課していないので利用者が多いのだ。

「君にも解き明かしたい点を見付けて研究をして貰いたい」

「お手伝いって、そういう……」

大きく瞬きするフィアに笑顔で返す。

「勿論僕の補助を頼むこともある。だけどその時以外は基本的に好きに進めてくれ」

現在僕の研究に携わっている人間はフィアの他に三人いる。

ひとりはケミオ先生。彼女は眠鬼^{ヒスグ}の血が濃く、この世の大概の事は知っているようだが種族特性上それを簡単には教えてくれない。まあ初めから答えを教えて貰えてもつまらない。ある程度推論が纏まったら彼に話してみても、その反応を見て真偽を量る……という具合だ。僕の知り得ない情報であるダートの事については比較的口に出して教えてくれるのでそれも大変助かっている。どうやら端末としてあるターミナル・ストーンはダートで繋がっているのではと予測しているからだ。

もうひとりはファズ先生。鉱石学を教える封術士で、封術の観点からターミナル・ストーンを解析して貰っている。気の回る先生で、研究に没頭して寝食を忘れそうになる僕をよく氣にかけてくれている。

最後のひとりは魔術監査局の役人で、全面的に手伝ってくれているわけではないが研究内容を知る者として極偶に情報を提供してくれている。研究室の設立には魔術監査局への研究内容の報告義務があるのだ。その義務を課したのは他でもない僕なのだが。以前の塔は少しばかり自由すぎた。塔——即ち魔術師協会の長として、魔術師の秩序を糺すため監査局の設立も行った。

まあそんなわけで。

これからはフィアも加えて研究を進めていく。

彼はどんな発見をするだろう。楽しみだ。

初日。どうやらフィアは、内部術式システムの読み込みから始めたらしい。どういった機能が組み込まれているか、何が使われていて何が眠っているのか。以前に僕がファズ先生と共に書き出した資料と照らし合わせて丹念に解読している。どこことなく、何か目的を持ってそれを探し出そうとしているように見える。

頼もしい姿を暫し眺め、僕もネットワークの解析を再開した。

暫くして。

フィアは術式解読書を握りしめて僕のところに来てきた。

「先生、此処！ 此処の解読お願いします」

見付けてすぐ走ってきたのだろう。息は切れているし紙はグシャグシャだ。縋れて読み辛い事に気付き慌てて皺を延ばしている。

「そんなに擦るとインクが擦れてしまうよ」

適当なところで止めて、フィアが見て欲しいという式を注視する。

「この術式は……」

以前調べた内容を全て暗記しているわけではないが、こんな術式はなかった気がする。エネルギー……特に魔力の、貯蔵と解放に関する内容だと読み解ける。かなり複雑で今ざっと見ただけでは詳細までは解らない。

「デコイコードの中に埋もれて隠されてましたけど生きてますよね、これ」

「そう見えるね」

確かにターミナルは物質だけでなくエネルギーも転送できるだろうとみていた。建国から暫く各国はゲブラーに対して『力』を送って支援したという話があるが、これは戦力としての人員や武器ではなくターミナルを通じて本当にエネルギーを送っていたのでは、と。

「よく見つけたね」

「えへへ」

改めてフィアに目を向けると、愛らしく頬を緩ませて笑んでくれた。思わず僕より高い所にあるその頭に手を向ける。フィアは身を屈めて頭を撫でさせてくれた。

フィアが見つけてきた術式はよく見ると二種類あった。どちらかのみ単体で見つけていたら何を示しているのか気付き難かっただろう。二種類併せて見て初めて解った。この術式は思った以上に複雑で、予想以上に危険だと。

転送、貯蔵については異質な点はないが、解放に関する部分がかなり問題だ。送られてきたエネルギーが魔力に類するものであった場合、超高度・高威力の攻性術として展開される仕組みになっている。恐らく対玄霊用に調整されており、転送されてきたエネルギーを受取手が居なくとも目的通り作用させる為なのだろう。

「……………」

もしもこの条件分岐用の術式を知らずに転送式のみ見付けていたら、僕はエネルギー転送を試してみようとしただろう。そしたらどうなっていたか。考えるだけで肝が冷える。

こういった隠しコードが他にもないか調べておいた方が良さそうだ。

ファズ先生とフィアと僕、三人掛かりでデコイの山を洗い直す。

デッドコードが多いとは思っていたが、解説されにくいようにわざと散りばめてあるらしい。単独では解読しにくい術式も、慎重に読み解いていく。それはとても膨大な量で、三人で手分けしても長大な時間が掛かる。暫くは他の研究はそっちのけだ。

そして、それを見付けた。

嚴重に暗号化された一画。現代人にとってはターミナル自体がブラックボックスではあるのだが、一部明確に意図的なブラックボックスが存在した。

「これは：恐らく解析に何年か掛かるだろう」

「そ、そんなに」

いや、早くて数年だ。ターミナルにも制作者がいると思えば驚嘆する。どんな頭の造りをして
いるのだから。

とにかく、今のところ危険な術式コードはフィアが見付けてきたもの以外は出て来ていない。解読が
進むまでは実験は控えて、慎重に調査を進めていこう。

フィアの部屋を訪れると、中から話し声が聞こえてきた。来客中ならばと引き返そうとするが、
聞こえてきた声に思わず足が止まった。

逡巡の後、ノックする。

「フィア、今いいかい？」

「あ！はいっ」

間もなく招き入れられたが、やはり人影はない。

「今誰か来ていなかったか？」

問うと、フィアは素直に肯いた。

「ラベゼリンが。偶に遊びに来てくれます」

本当に偶にですけど、と付け加える。

「そうか。彼の神が神殿以外に現れるのは珍しいね」

成功の鬼神に気に入られているのならフィアは間違いないく大成するだろう。

「それで…何かありましたか？」

「ああいや、昼のお礼を改めて思ってたね」

「そんな！あれはいつものお礼なので」

本日の昼食はフィアが用意してくれた。『父の日』のプレゼントだと言ってくれたのが嬉しくて、こうして返礼を持参したのだ。

「ではこちらも常のお礼だ。僕もフィアには世話になっているからな」
持っていた箱をテーブルに乗せて見せれば、フィアの瞳が輝いた。

「こ、これ…！フェラルの…！」

塔で人気の店、フェラル・カフェの焼菓子の詰め合わせだ。本当に気持ち程度の品だが、どうやら好みに合ったようで安心する。

「先日僕も頂いたが、とても美味しかった」

「ありがとうございます！…お時間あれば、一緒にどうですか？」

えーと、と室内を見渡して、

「ルガッガなら用意できます」

「じゃあ、少し頂こうかな。ミルクたっぷりで頼むよ」

「はい！」

ルガッガは意識の覚醒作用があり塔でも好む者は少なくない。ただチョコレートと同様に輸入に頼らざるを得ない品なので少し高価で学生には手が出し辛いのが難点だ。フィアの出してくれたものは恐らくファズ先生からの貰い物だろう。彼はルガッガを特に好んでいる。

「君はブラックかい？」

「あー、眠気覚ましに頂いてたんで…慣れちゃいましたね」

ちよつと意外だったが研究員には間々ある事だ。

「頻繁に飲むんじゃないなら構わないが、身体には良くないから気を付けるように」
フィアは苦笑いで肯いた。しまった。説教になってしまったか。

「処で先生、隠し部屋への再挑戦はまだしませんか？」

「ん？ ああ、あの感じだと今はまだ実力不足かな」

「そうですか…とフィアはカップを両手で包んだ。

「フィアは、あの部屋に何があると思う？」

その質問に数度瞬きをして

「知恵を司る聖霊の隠し部屋ですから、きっと彼の遺した膨大な知識ですよ」

「なるほど。それはいい！」

ターミナルの解析に難航している今、だからこそ隠し部屋への再挑戦を提案してきたわけだ。

「多分、これは本当に私の予測なんですけど、リブラビスは其処にあったんじゃないかなって思ってます」

リブラビス。聖霊の遺産、神殺しの魔弓。

十年前、塔が玄霊戦に送り出した最後の魔術師が持っていた武器。

「彼は隠し部屋を見付けて、魔弓を得た……というか、魔弓の製造方法を知った」

ああ、そう言えば自作したと聞いている。オリジナルは六百年程前から史書に登場しなくなった。彼の作った魔弓は再現力を高く評価され、本物と同じ名を付ける事が許された。だが、一応所有者は塔で彼は貸与されたという扱いになっている。因みに、彼の死後現在は別の者に貸与されている。

「それは面白い推論だ」

フィアとの一時を楽しんでいると、カリカリカリ……と何かが遠慮がちに扉を引っ掻く音が聞こえてきた。

「？ ちょっと見てきます」

フィアが扉を開くと、ウサギのようなものが飛び込んできた。

「わっ!？」

「これは……ファズ先生の使い魔だね。何かあったかい？」

一直線に僕に向かってきた使い魔を抱え上げる。

『ご歓談中申し訳ない。ちょっと対処に困りまして……』

ファズ先生の声だ。本当に申し訳なさそうな声と、本当に困惑した様子が伝わってくる。

「先生が狼狽えるなんて珍しいね。どうした？」

『その……』「あら、繋がったのね」

ファズ先生の報告を遮って、別の声が割り込んでくる。なるほど最低な展開だ。

『ルエイエちゃん、父の日のプレゼントありがとう。お礼に会いに来てあげたわよ』

「母上……」

望まない来訪者に思わず拳を握り締めた。

「母上におかれましてはご健勝そうで何よりです」

「ふふ。魔術の腕はまた少し上がったみたいだけれど、態度は相変わらずねえ」
余裕の笑みが本当に癪に障る。

「でもまだまだだわ」

僕の現状精一杯の呪いを贈ってやったのに、瑕ひとつ付いていない。思わず舌打ちしそうになった。

「それでねルエイエちゃん。お礼も勿論するけれど、貴方、後見人をしてるんですってね？」
しらばつくれようと口を開く前に、母はすつとその細い指で僕の背後を示した。

「きつとその子ね？」

「フィア!？」

「す、すみません…ルエイエ先生のお母様、見てみたくて…」

目の前の母を警戒し過ぎて背後を疎かにしていたと反省する。着いてきていたのに気付いていなかった。

「ふふ」

止める間もないひと振り。フィアに向けられた電磁の魔術は——
パンツと呆気なく弾かれた。

「吃驚した……なんですか？」

母も僕も目を見開く。

今のは決して即席の簡単な魔術ではない。術式を予め組み上げておいて保持し、あの一瞬で動作させただけだ。恐らく端からフィアに掛けるつもりで準備して来たのだろう。丹念に仕込まれた高度な呪術はしかし、弾かれた。目の前できょとんとしているこの学生に。

甚く自尊心を傷つけられただろうと振り返れば、母は未だ目を開いたままだった。

「……やだ。ルエイエちゃん。この子、なに？」

「……僕も驚いていますよ。フィア。君今何を？」

「えっ……あの……攻撃されたので、防ぎました……」

肩を竦めて消え入るような声で絞り出す。うん、それは解る。

じいっと穴が開く程フィアを見ていた母が一步詰める。咄嗟に立ち塞がるが手でぐいっと押し退けられた。

フィアに息がかかる程顔を寄せて曰く。

「あなた……本当は幾つ？」

「……？」

どういう意味だろう、推察が成り立たない。フィアも怯えながらも小首を傾げている。

「面白い子。ターミナルを使ったのね？」

瞬間、フィアは僅かにたじろいだ。

「あはは、ふふふ！そう。いいわ、いい見つけものをしたわ。ここは退いてあげる。でも手ぶらで帰るのも癪だし、スナフ君とでも遊んでから帰るわ。またね、ルエイエちゃん、フィアちゃん？」

「すぐに帰って下さい。もう来なくていいので」
取り敢えずは厄介者を追い払う。

本当にこの人と顔を合わせると碌な事がない。



「大丈夫か？」

完全に立ち去ったのを確認してフィアに向かい直す。

「先生のお母様にお会いしたの、今回が初めてでした…お綺麗な方ですね」

「年齢不詳だがな。心も外見も若くて困る」

ふふ、とフィアから笑いが漏れて、少し気恥ずかしくなった。些か大人気ない対応を見せ過ぎた。『母』というのはこれだからいけない。

「スナフ先生大丈夫かなあ」

「おや？ ナナプトナフト先生と面識があったのか」

「……え　っと、はい」

フィアは上級攻性術の授業は受けていない筈だが、授業以外で縁があったのか。少し意外だ。随分親しみが込められた眩きだった。ナナプトナフト先生は外見上よくモテるのでひょっとしたらフィアもその類いかも知れない。

それにしても。

「本当になんともないみたいで安心した。あの人の魔術をノートタイムで完全に無効化するのは…」

「あ、えーと…実は此方も障壁を事前に組んでました。お母様には注意するよう言われていたので…」

驚いた。そんな有用なアドバイスをしてくれるならファズ先生だろうか。

術式の事前準備は保持が難しくまた組んである事がバレやすい。僕にも母にも覚らせずに隠し持っていたとは大した技術だ。障壁自体もかなり高性能なものだった事も併せれば、上級魔術師でも此処まで出来る者はかなり少ない。それこそ母や僕くらいのものだと思っていた。

「僕も本当にまだまだだな…」

教え子の此処までの成長を把握も予想も出来ていなかった。

「あの…先生」

「ん？」

言い出し難そうなフィアに目を向ける。何度も視線を彷徨させてから

「歳を聞かれました。ターミナルの使用についても…どういう意図だったのかお解りですか？」

不安そうな様子でそう尋ねてきた。

「すまない。僕にも意図が解らなかった」

その返答にフィアは「そうですか…」と俯いた。不安を晴らしてやれないのは悔しいが、あの人の言う事だ。意味が無い筈はない。迂闊に「気にするな」とは言えなかった。

塔の講師たちの集まりというものも、偶にはある。情報交換や顔合わせが目的だ。大切な共有情報は僕から各個通達するし報告も貰うが、講師同士で話して貰う時間も必要だろう。特に問題が起きていなければ大体半年に一度のペースでこの連絡会は開かれている。塔の講師はそれなりの数がいるから全員で顔を合わせる機会はこの連絡会くらいのものだ。形式は会議のような堅苦しい雰囲気ではなく、立食形式のお茶会……と言えいいだろうか。講師は老齢者も多いから座れる場所もそれなりに用意してあるが基本は立ち話だ。講師たちが歓談する様を眺めていると、ぬつと陰が伸びるように僕の前にひとり現れた。

「学長にはご機嫌麗しく……ルリエの魔女が来たそうですな？」

「おやウイユ先生。耳が早いね」

「ナナプトナフトが荒れておりますからな」

ああ……。思わずナナプトナフト先生を目で探す。こういう社交の場を好む筈の彼は、会場の端でソファに腰掛けている。大変に機嫌が悪そうだ。気の毒に……。

「ああ、彼女来てたの？ 会いたかったなあ」

少し早口の高い声に目を向ける。

「トビオカ先生。お戻りだったんですね」

トビオカ先生は今は基本的にティフェレットの環境局に常駐していて塔にはいない。水質をメインに環境保全の研究を行っている。全属性に対してかなり高い適性を持つ稀有な能力がありな

がら、当時の塔に於いて攻性術を好しとせず外国での研究を選んだ尊敬できる変わり者だ。何故環境に進んだのか尋ねた事がある。返事は、「だって、アレはいつか誰か倒すでしょ。その後の彼の地はポロポロです。誰かが住めるようにしてあげなきゃいけない。かなり難しい筈ですよ。だからトビオカ君が準備しておきます」だった。実際玄霊はいなくなった。それでも今はまだ誰も立ち入れない土地だが、これからは環境整備も考えていかななくてはならないだろう。塔にその準備があればケテルとの『交渉』が期待出来る。

「トビオカ先生。ルレイエの魔女に御用が？」

ウイユ先生が厳しい顔をして問うがトビオカ先生はケロッとしている。

「だって彼女、宰相直属でしょ？ マスカルウインの件準備は進んでる事伝えて欲しいです」

「ご心配なく、先生。時期が来たら直接塔から国に報告を入れます」

「そう？ ならいいか」

そのままふたりが歓談を始めたのを確認し僕はナナプトナフト先生の元へ向かった。

先生は僕を見るなり

「…おまえか。特に報告はないぞ」

とぶっくらばうに吐き捨てた。うん。かなりご機嫌ナナメのようだ。

「母が無礼をしたようで申し訳ない」

「おまえが謝る事じゃないだろう。あの人は昔からあんなんだ」

苦笑いで応える。先生たちは僕よりもあの人との付き合いは長いのだ。

「隣に座っても？」

「ハ、膝に乗せてやろうか？」

「いいのかい？」

「…冗談だ。本気にするな」

もつと小さい頃は本当に膝に乗せて貰った事がある。肩車もして貰った。あれは僕がお願いしたわけではなかったが。肩に座ると視界の高さは凡そ二mくらいあって、新鮮だが結構怖かったと記憶している。

「それは残念だ」

ひょいと彼の隣に飛び乗った。

「おまえ、もう十を超えただろうが。膝に乗りたいたなんて軽々しく口にするなよ」

「でもこども扱いしてくれるのは君だけだからね」

先生は力一杯面倒臭そうに顔を歪めて、盛大に溜息を吐き脱力しながら僕の頭をわしわしと乱した。

「ぼくはおまえがこどもの内はこども扱いすると決めてるからな」

「知っているとも。だからつい甘えてしまう。すまないね」

別にこども扱いされたいわけじゃないし特別大人扱いされたいわけでもない。どう扱われるか

に望みはないが、立場上皆礼を尽くしてくれるから、結局こども扱いして貰えるのは新鮮だ。
ナナブトナフト先生だって公式の場ではちゃんと立場を立ててくれる。

「甘やかすだけが『こども扱い』じゃないぞ。教育は大事だからな」

「…ふ！僕に言うのかい!？」

込み上げた笑いが抑えきれない。彼も少しは機嫌が直ったようだ。

笑い続ける僕に呆れた顔で笑ってくれた。



学長室に戻ると、またしても見たくない顔が待っていた。この短期間で二度も現れるとは勘弁して欲しい。僕の机に凭れ掛かってヒラヒラと手を振っている。

「なあにその顔。もっと喜んでくれてもいいじゃない？」

随分な無理を言うものだ。

「何かご用ですか？」

「んふふ。ねえあの子、フィアちゃん。とってもいいこね」

思わず殺気立つ。

「やあねえ。少しお話をしただけよ」

すぐに帰れと言うわけにもいかなかった。仕方なく来客用のソファに腰掛け、一応、正面の席を勧める。

「あらありがとう。お茶は出ないの？」

「水くらいはご自由に」

テーブルの上の水差しを視線で示す。

「まあサービスの悪いこと」

さつさと用件を言えと目で訴える。

「そうねえ。あんまりにもフィアちゃんが健気でいい子だったから、これはお節介よ。本当に単なる助言。穿ち過ぎないように聞きなさい」

内容を聞いてみないことには判断できない。先を促す。

「ターミナルの解析は一旦停止なさい」

「何故」

「貴方には手に負えないものよ、今はまだね」

「……」

「聖霊の隠し部屋の攻略が先ね。あそこに辿り着けたら『意味』が解るわ」

何のか。母の言葉の意味か、ターミナルの存在理由か、それとも他の何かか。

「あの子にあんな業を背負わせたのは貴方なんだから、これ以上苦しめてはダメよ」

「…何の話ですか」

「貴方ならその内解るでしょう。あの子に聞いても無駄よ、答えられないの。話してはいけな

い約束なんでしょうね」

それは恐らく、度々感じる違和感の正体なのだろう。

僕の知らないフィアの話之母から聞くのは腹が立つ。

「用件は以上ですか」

「そうね。忠告はしたわ」

「ああそうだ」

立ち上がる母にひとつだけ声を掛ける。

「トビオカ先生が会いたがってましたよ」

「あら。トビー先生、今塔にいたのね」

「当面、ターミナルについては術式解析のみに集中する」

元より凡そその予定ではあったが、改めて協力者たちにもそう明言する。流石に研究の全面停止とはいかないが、実験的なアプローチは禁じておく事にした。

これを聞いたフィアは狼狽えて

「あの…ひょっとしてお母様から何か…」

「ああ。だが気にしないでいい。言いたくないことや言えないことは黙ったままでいい」

僕だって、口に出来ない苦難を見抜いて助けてあげられるようになりたい。母伝など悔しくて仕方がない。

「君が言っていたように、聖霊の隠し部屋を頼りにしよう」

フィアが何を背負っているのかはまだ解らないが、あの母が同情するような事だ。可能な範囲で話してくれるヒントは取り零さないように気を付けねばならない。フィアの苦勞は僕の所為だと母は言った。正直全く心当たりがないのだが、そうでなくとも。

「僕は君の助けになりたい」

——ルエイエくんは先生になるの？

バッタを追いつくすのに疲れてふたりで芝に寝転がっていたら、ふと彼はそう問い掛けてきた。そうだよ、と僕は返した。

いつになるかは解らないけど、いずれ僕は塔を継ぐ。それは魔術師協会の長になることで、魔術師養成施設の長になることだ。今はまだ学ぶのみの身だが、いずれは学びながらも教える身になる。

——じゃあ『君』なんて呼べないねえ。先生。ルエイエ先生。私にとってはもう先生だもんね、ルエイエ先生って呼ぼうか。でもさあ

「先生、ルエイエ先生」

「……」

「ダメですよ、机で寝ちゃ」

頭を起こして確認する。なるほど。書類に目を通してある間に落ちたらしい。よし、涎は垂ら

していない。

「近頃は前にも増して頑張ってますもんね。健康には気を付けないとですよ」
そう言いながらフィアは湯気の立つカップを机の端に静かに置いた。

「…凄い匂いだな。これは確か——」

セヴァムと言ったか。ケセド発祥の、複数の葉草を煎じた茶だ。

「最近いらつしゃった、あの——…植物学の先生に頂きました。オリジナルブレンドだとか」
体に良いらしいですよ、とにこやかに微笑まればとてもじゃないが飲まないわけにはいきな
い。

「香りは特徴的ですけど、味は調えられましたよ」

「なるほど」

そうは聞いても中々に覚悟がいる。

カップを手にひとつ目を閉じ、思い切って口を付ける。

「——本当だ。スツキリした味だね」

後味も悪くない。飲み易い。

「先生。目が覚めたら、手合わせしてみませんか？」

「手合わせ？というと…魔術を使った模擬戦かな」

そうです！とフィアは意気込む。ふむ。偶にはいいかと思案しているとフィアはふん！と

胸を張った。

「先生。多分、手加減はしていませんよ？」

「ほう？それは楽しみだ」

実際に母の呪術を払った前歴もある。真剣に相手をさせて貰うとしよう。

「これは驚いた……！」

攻性術自体の技術も威力もかなりの高さだ。その上幻術を織り混ぜて翻弄してくる。これは確かに手を抜いていられない。

「えへへ。攻性術はスナフ先生のお墨付きです！」

「なるほど」

攻防戦は白熱してフィアも随分興奮しているようだ。こういう手もあったかと思う反面なんだが申し訳ないような気持ちにもなるので誘導は自重しよう。

此方が様子見で放った術はやはり呆気なく霧散させられた。一応万一の時の為にと仲裁役と医療師を呼んでおいたが、この調子だとふたりの出番もあるかもしれない。

フィアの成長は嬉しいが、僕にも師としての矜持がある。少し出力を上げていこう。このまま競り合いが続けば体力の劣る僕が不利だ。

次で決めようと大型の術式を組み始めれば、覚さとられたのか気があったのか、フィアも大術を組み始めていた。先程までの雑な魔力放出が止み、急に効率的に動かし始める。先程まではわざと必要量以上の魔力を消費させていたのだろう。この大術はその余力がないほど大掛かりという事だ。

不覚にも口の端が上がっていくのが解る。

ああ、魔術の競い合いでこう思うのは久しぶりだ。

「あははっ！ 凄い！ 楽しいな……！」

「先生、覚悟して下さい！」

フィアが術式を組み上げる。そのタイミングで僕も術式を完成させた。

「こちらの台詞だよ」

「!!」

完成した筈のフィアの術は不発。驚いて動きが止まったフィアにゆっくりと杖を振り下ろす。こっつん、と軽く頭に一撃。それでフィアは呆然と崩れ落ち屍餅をついた。

「……負けました」

フィアはパチパチと瞬きを繰り返す。

『『静寂の檻』だよ』

「…並の封術なら弾き飛ばせるのに」

「だろうと思って、思い切り強力にした」

『静寂の檻』は全ての魔術効果を打ち消す結界だ。効果中は術者本人すら一切の魔術が使えなくなる。

わつとあがった歓声に首を巡らすと、いつのまにか多くの観客が集まっていた。

「…おや」

「学長が模擬戦を行われるのは珍しいですし、だいぶ派手に打ち合いましたからね…」
 ファズ先生は肩を竦めながら僕らに近寄るとフィアの手を取って立ち上がらせた。

「仲裁に入るのは中々骨が折れそうでしたし、無事に決着して安心しました」

「はいはい、おふたりともケガはないですか？ あら。あれだけやり合ってお互い無傷ですか。つまらない」

医療師にざつと診て貰い双方の無事を確認。模擬戦は終了した。

「フィア、とても楽しかった」

素直な感想を告げるとフィアもまた肯いて緩い笑みを浮かべた。

「へへ。次は負けません」

「ああ。次も負けないとも」

思い切り魔術を使う。というのはひとりでも出来なくはない。実際ストレス発散にやってみたりもする。秘密だが。しかし『競い合う』というのは相手がいなくては難しい。僕には得難いものだと思っていた。

……嬉しい。単純に、楽しい。

助けたいと思うのにも助けられてしまう。どちらが先生か判ったものじゃない。

ふと前の夢を思い出す。あの言葉の続きを彼は果たしてくれているなと思った。頬が緩むのを止められなかった。

——でもさあ。偶には先生をお休みして、またこうやって遊ぼうね。疲れ果てて転がるくらい！きつと楽しいよ。

久々に身体を動かしたお陰か昨晩は大変快眠だった。やはり育ち盛りの身体には適度な運動と

睡眠が大切だ。

「さて」

昨日後回しにしてしまった思考を呼び起こす。

『スナフ先生のお墨付きです！』

フィアに虚言癖がなく認知能力も正常だと仮定すれば、あの発言は問題だ。意図せず溢されたヒントだろう。先日先生にも確認を入れた。フィアとナナプトナフト先生には面識は無い筈だ。取ってもいない幻術と攻性術を使いこなし、教えと違う術の使い方をする。かと思えば、教え通りの使い方も出来る。

『貴方、本当は幾つ？』

幾つか推測は立ちつつあるが。

『ターミナルを使ったのね』

やはり行き着く先はターミナルだ。

ブラックボックスの解析は滞っている。

「うーん」

思わず小さすぎる我が身を嘆く。しかしこればかりは仕方ない。今出来る事を考えよう。であれば——情報収集と技術の研磨だ。

「呼び立てて済まないね」

「ルレイエ師のお呼びとあらばいつでも駆け付けますよ、出来る限りは」

ノイチエは今日も誠実だ。

彼は監査局の役人で、前にも説明した通り僕の研究を偶に手伝ってくれている。ワーナー出身の魔術師の中でも彼の名前は特に長いので略称のノイチエで呼ばせて貰う。

「今はどのような具合で？」

研究の進捗をざっと説明する。

「なるほど」

ノイチエは顎を摘まんで暫し逡巡の後

「残念ながらそれに関して有用な情報は提示できません。ルレイエの魔女が隠し部屋が先と言ったのならそこに解析の為のヒントがあるのでしょう」

まあそうだろう。

「何か良い情報を得たら教えてくれ」

「ええ勿論」

コンコン、と。丁度よいタイミングで控えめなノックの音が響いた。

「おや。ここらで失礼致しましょうか」

「いや、居てくれ。折角だから紹介も兼ねて君を呼んだんだ」

ノックの主に入室を促すと、扉からちよこんと顔を覗かせた。

「ご来客でしたか。出直しましょうか？」

似たような台詞を言うフィアにノイチエの視線が釘付けになる。

「いや。君に彼を紹介したくてね。協力者の——」

「ル、ルエイエ師！なんですかコレは！かわいい！やだかわいい！」

僕の言葉を遮ってノイチエは叫びに近い声を上げた。興奮した様子で身をくねらせている。

「か、かわいい……？」

フィアも引き気味だ。

「そう言われたのは、ふたりめです……」

「ふたりめ!?なんて見る目の無い！ねえルエイエ師！君、私のものにならないか」

「えっと」

うん、まあ。彼の好みかなと危惧はしていた。

「そこまでだ。フィア君はあげないよ」

「おっと」

我に返ってくれたようで、ノイチエはさっと姿勢を正した。

「これは失礼。魔術監査局倫理監査官、ノイチエです。お見知り置きを」

「あ、は、はい。ルエイエ先生のお手伝いをしていますファイアです。宜しくお願いしま…す？」
まだ少し混乱しているようだがノイチエが正気に戻ったのなら心配はないだろう。

「暫くしたらファズ先生も来る。ちよつと皆の力を借りたくてね」

ファイアが目を丸くする横でノイチエは素早く「光栄です」と礼を取った。

「暫く歓談といこう。それでだ」

一人目が誰かは敢えて聞かないが、僕の意見も伝えておきたい。

「ファイアは僕にとつて、『カッコいい』だからね」

ぼんっ！と。

ファイアは爆発した。



ふたり掛かりで褒めちぎった結果、ファズ先生が来た頃にはフィアはすっかり茹で上がってしまっていた。

「さあでは皆の知恵を借りたいと思う。隠し部屋の仕掛けについてだ」

正直に言うとは自分ひとりの力で解きたかったのだが、こう急かされては仕方がない。仕掛けと僕なりの解を一通り説明して意見を求める。僕が導いた解では必要魔力が高すぎてあと一歩及ばない。別の視点からのアプローチが必要だ。

「解はあつてますし、やっぱり先生に頑張つて貰うしか。魔力の運用効率を極限に高めるとか、塔の結界に回してる魔力を一時的に解除するとか」

フィアがまっすぐに意見を述べると、ファズ先生は少し難しい表情で指摘する。

「一時的であれ塔の結界を解除するのはどうかと」

塔の結界というのは主に気圧や風、雷などから塔を護るシステムの事だ。凡そ自動化されているし回している魔力も極僅かだが、これを一度絶つと再起動には時間が掛かる。リスクとリターンが釣り合わない。

「いやいや皆さん正気ですか!? ファズまで!」

ノイチェが声を張り上げる。視線を集めたノイチェは乾いた笑いを咳払いで振り払ってテーブルに両手をついた。

「どう考えても、これは『足りない実力をどう補うか』という謎掛けです。あと一歩で正面突

破なんて想定外……いや想定くらいはしてあるでしょうが、正攻法じゃないんですよ逆になんとか。フィアも驚きすぎて目が点になっている。

「……ルリエの魔女はともかく、魔弓使いも入ったという想定なんでしょう？」
肯く。フィアの予想でしかないが僕もこの説は推している。

「だったら特に。彼は確かに強かったですが、総合力で今の師以上であつたとは思いません。師やフィア君は知らないにしても……ファズ、君は彼と同期だろ」
振られたファズ先生は「いやあ」と頭を掻いた。

「彼ならひょっとして、と」

「美化しすぎだ」

しかしこれは納得だ。求めてくるのが能力であるという点に僅かながら違和感があつた。何せ相手は知恵を司る聖霊だ。ノイチェの説は非常に腑に落ちた。

「であれば最初から解き直した。かなり変わってくるぞ」

解つてしまえば拍子抜けするほど簡単だつた。僕は今その扉に手を掛けている。固まってしまう思考の方向性を正すには、時間と並んで他人の意見も有用だ。僕だけの力ではないことは多少悔しさが残るが、恥ではない。胸を張って扉を開こう。

「さあ。何を隠したのか見せて貰おうか。我らが聖霊よ」

何処かぼやけたような滲んだ景色。書庫：いや書斎か。中身の詰まった多くの本棚に、床に机に積み上げられた本の山。その陰から大柄な人物の背が覗いている。

「よく来たな、魔術を継いだ子」

側にはこれまた大きな杖。たくさんの蓄石の付いた立派な魔術杖が机に立て掛けられている。

「漸く此処へ至る子が現れ始めた。長かったよーな、短かったよーな。テメーで三人目だ」

「三人目……」

思わず声を漏らすと、その人物は漸く此方を振り返った。

「おれさまはラツィー……の、写しだ。此処へ至れたご褒美をやろう。何が知りたい？」

ラツィー。コクマの創国主……つまり建国者にして塔の建設者。我らが始祖たる聖霊の名だ。

「僕は現在の塔の管理者だ。その……『写し』というのは？」

「んん？ 前に来たのもそう言ってたぞ。そんなに経ってねーと思ったが……代替わりが早過ぎねーか？」

やはり。

「それは恐らく僕の母だ。時代が変わった」

「玄霊を討ったか」

「貴方の託した弓を引き継いだ者が収めた。残念ながら塔の人間じゃない」

「へー。詳しく聞かせろ」

「頻り昨今の世界情勢を説明する。どうやらフィアの予想も当たりのようだ。」

「なるほどな。ところで、そいつらはターミナルを使ったか？」

「さあそこまでは。しかし存在登録はしている筈だよ」

「ふーん」

聖霊の写しは曖昧に目を逸らした。

「そろそろ此方の質問にも答えて貰おう」

「あー、そーだな。写しは写しだ。複写、複製品、コピー。オリジナルはとっくに死んでる。おれさまは記録の再現品だ」

言葉の意味なら解る。その原理を訊ねているのだ。

「ターミナルと同じだ。あの癪な術式を真似させて貰った」

「ターミナルは、貴方が造ったのではないのか」

「ちげーな。ネットワーク解析してみりやすぐ判る。大元が何処かなんてな」

続きは言うなど慌てて止める。いきなり答えを与えられるなんて冗談じゃない。

「なんだ。テメーはターミナルを解析しよーとしてんのか」

聖霊の写しは楽しそうに身を乗り出した。

「漸くか！どーだ、何処まで解ってる」

転送機能、ダートとの繋がり、エネルギーの蓄積・発射機能。解析不能のブラックボックス。解っている事は多くない。

「まあ始めたばっかにしちや読めてる方だ。しかしそーか、『魔力』か。あぶねーな」
興味深そうに僕を眺める。

「それは恐らく有翼種が持っていた力が薄まったもんだ。煌力に近く玄力に近くそのいずれでもない力。当時無かった種類だけに、プログラムが対応してねーんだな」

僕が『魔力に類する力』と読み解いた部分は正しくは『有翼種の持つ力』だったというわけだ。それがゲブラー宛てで送られれば発射される。しかしよく似てはいるものの明確に定義されていない魔力に対してはエラーを起こしかねない…という事らしい。

「最悪暴発して塔壊滅、なんて未来もあつたかもな」

血の気が引いた。

「待ってくれ。話を戻すが、貴方はターミナルと同原理による再現品だと言ったな」

「言った」

存在登録。複製。『転送』。

過去の人物を現在に『再現』する。

それならば、ひよっとして。

「未来の人物も、過去に『再現』する事は出来るのか」

「出来る」

「……！」

聖霊の写しは僕をじっと見据えて言った。

「が、過去だろうーが未来だろうーが存在複製機能へのアクセスは管理者権限が必要だ。容易には出来ねー」

「ブラックボックス……」

「にしてあるだろうーな。私用で使われちゃあカオスになる」

それはそうだ。特に過去への転送は使いたい者も少なくないだろう。セキュリティは万全を期して当然だ。そもそもその機能自体どうかと思う。

「あいつが何を想定してたかは知らねーが、ターミナルに存在を記録し再現するこの機能の目的は『世界に対する脅威への対策』らしい」

「世界に対する脅威……？ 玄霊の事ではなく？」

「違うんだろーな。玄霊相手には機能しなかった。……とは言え玄霊を下したのも結局あいつの蒔いた種か。面白くねーな」

聖霊の写しは急に全てに興味を失ったように大きく欠伸をした。

「話し過ぎた」

「待ってくれ、最後にこれだけは教えて欲しい」

「何だ？」

知っておかなくてはいけない事。フィアを安心させるために。解放するために。
ターミナルに対して、何をしてはいけないのかを。

当時の私は、勉強が苦手で未来も決められずただだらだと時間を消費するだけの駄学生だった。同級生が将来雇ってくれると言ったその軽口に期待して、就職も本気で探さなかった。でも、そんな日々は長く続かなかった。

ある日、塔は崩れ落ちた。

天高く塔を真つ二つに貫いた光を見たという者もいるらしい。物凄い轟音と地響きを体感したものは多数いる。一国に相当する面積、住民、施設が縦に積まれた、かつては世界一の高さを誇った塔の崩壊。近隣地域を巻き込み、歴史上類を見ない規模の被害を出した。塔及び塔下地域は全壊。即座に国から救助隊と調査隊が派遣されたが、助かった者は極僅かで、一年を越える調査も虚しく原因は不明とされた。

ただ、その瓦礫の山の中で。

ターミナルだけは大した損壊もなく平然と佇んでいた。

私はその時、偶々ラベゼリンの神殿に出向いていた。神殿も揺れたし、土煙も届いた。崩れ落ちていく塔の姿も見えていた。

「おい、やめておけ。アレはもう救いようがない。誰も生きてはいないだろうよ」

「いや戻る。先生たちも居るんだから、きっと生きてる！皆助ける。『成功』させてみせる」

ラベゼリンは舌打ちして、こちらに向けて花を放った。慌ててキャッチすると、何故か驚いた表情をしていた。

「行ってくる！」

「…その花、大切に持っておけ！」

背でその叫び声を聞いた。

直後の混乱に乗じて崩れた瓦礫の上を走った。国からの派遣部隊が本格的に動き始めたら恐らく立ち入り禁止にされてしまう。誰か居ないか。探そうにも、何が何処やらさっぱりだし、土煙もまだ収まりきっていなかった。

「おいテメー」

柄の悪い声に呼び止められた。驚いて振り返ると、随分大柄な人が瓦礫に腰掛けていた。あまり見ないレトロなデザインのローブが目を引いた。

「大丈夫ですか！」

「大丈夫じゃあねーな。もうじき消える」

「えっ!？」

どうみてもピンピンしていたので聞き返したが、彼は構わず自分の座る瓦礫を叩いた。

「この下がターミナルだ。特別にテメーにひとつ教えてやる」

突然何をと戸惑う私に構うことなく、彼は話を続けた。それは驚くべき内容で、一転私は真剣に彼の話を聞き始めた。

「そ、そんなことが…本当に？」

「これは未来と過去に枝根を延ばす世界樹の端末だ。そのくらいは出来んだよ、ムカつくがな」転送装置は利用法のひとつにすぎない。ターミナルの本当の機能は『存在の記録』。同一個体は同時に存在しないという絶対の設定の下、転送元のターミナルでその存在を記録し実体を消去、転送先のターミナルで転送されたデータを元に再構築する。召喚術による転移とは全く異なったシステムだ。では、同時に存在しなければ。記録したデータを転送する先が、現在と大きく時の異なる…つまり未来や過去であれば？答えは、『複製』が可能となる。更にもしそこにその時代の自分が存在するなら、そのデータを上書き出来る。言い換えれば、記憶を保持して過去に戻るのだ。

「でもそうすると姿が…？」

「送るデータを記憶に限定する。だが、あくまで複製だ。今此処にいるテメーはこのまま残る。この世界の塔は崩れたまま。テメーが救えるのは並行世界の塔だけだ。観測出来る世界が個人の全てだ。テメーには関係ねーつつたらねーんだが」

でも、複製された自分はその未来が見られるのだろう。ならばやってみよう。

「そりゃ良かった。並行世界とは言え、救えんのはテメーだけだ。断られなくて良かったぜ」

「それで：貴方は？」

「あー。もし次どこかで会っても、おれさまはテーマを覚えてねー。おれさまはこいつとは繋がってねーからな」

そう言いながらまた下の瓦礫を数度叩いた。

つまりまあ、彼も何処かの誰かの複製存在のようなものなのかも知れない。

そうやって、十九歳の私は十六歳の私を乗っ取った。この三年を何度繰り返しただろうか。原因がターミナルの暴発と知るまでに。それを止める為、ルエイエ先生のお手伝いが出るほどの力を得るまでに。隠し部屋の開け方を知るまでに。隠し部屋には彼が居て、聖霊の写したと名乗っていた。記憶転送の事も彼に会った事も誰にも言うなと毎度釘をさされたが、いつもヒントを与えてくれた。

ラベゼリンには全ての世界の記憶があるようで、話相手に丁度良かった。「オレたちは遍在している」とか言っていた。神様って凄い。

そうして漸く、先生と聖霊の写しを会わせる事に成功した。これで先生はターミナルの危険性を知るだろう。安全に研究を続けられるようになる筈だ。もう塔は崩れない。

あちらの私の手元では、ラベゼリンに貰った花は咲いただろうか。そろそろ私の記憶も上書きしてこよう。皆が生きているこの記憶があれば、一人で生きていく私の慰めになる。

「それで僕は何回塔を崩したんだろうか」

「ええと……十回以上は……」

目眩がする。フィアは三十年以上もやり直しを繰り返したのか。

僕がターミナルの存在複製機能を知った事で、フィアに掛かっていた『口止め』は一部解除されたらしい。当時の凄惨な様子を尋ねるままに教えてくれた。

「先生とても頑固だから私が言うだけじゃ研究止めてくれないし、隠し部屋も私が開けちゃうと拗ねちゃうし、なんだかんだ最後は爆発しちゃうんです」

「……う」

確かに、今回のようにログの提示もなく単に止めろと言われても僕は止めないだろう。だからあんなに必死で探してきたのか。隠し部屋についても、実際に皆の協力を得た事を悔しがった僕だ。フィアがサクッと開けてしまったらその反応も想像に難くない。

「いやしかし、拗ねた処で写しには会ったんだろう？ その時もダメだったのかい？」

「ふたりで行った所為か、その時は写しは現れませんでした」

「ああそれで」

皆に知恵を借りた事もあり全員で行ってみようかという話になった際、フィアは反対した。どうか最初は先生のみで、と。

「あと一回入ると場所と仕掛けも変わるみたいで」

「そのようだね」

退室後確認したが只の空き部屋になっていた。

「はゝゝ、でも良かった。これで安心です…」

「うん。もう塔が崩れるような失敗は犯さないと思う」

危険箇所は教えて貰ったし、危険な可能性があるという意識が強くなるだけでもだいぶ変わってくるだろう。

「そういえば、塔が崩れる時、毎回君は遠方に？」

「あーいや…たぶん、巻き込まれて死んだ事も多かったんじゃないですかね。ここは『私が生き延びた』世界なので」
なるほど。

「すまない」

頭が下がる。原因は間違はなく僕で、今だって幾つかの世界でフィアは独りになってしまっている。

「大丈夫ですよ。私さつき向こうに戻りましたから」

それでも、下げた頭が上げられない。

フィアは困って——下げたままの僕の頭に手を乗せた。ポン、ポンと。とても優しく撫でられた。

「大丈夫だよ、ルエイエくん」

「……………」

驚いて顔を上げる。優しい笑みを浮かべていたフィアも、それに驚いて手を離れた。

「すすすいません！失礼しました、なんかそのつい……！」

「あ、いや違う！責めてはいない！」

お互いに慌てて弁解し合う。

「責めてはいないんだ。その……懐かしくて、驚いてしまった」

「……………」

「君は覚えていない筈だが……昔ね、彼は僕をそう呼んでくれていた」

塔で最初に会った時、フィアは「お久し振りです」と僕に言った。今思えばフィアが体験しているループの所為なんだろうが、そんなことを思いもしない僕は善くない事と知りつつも期待したのだ。

「彼……？」

彼と僕との約束だ。フィアを助ける。フィアを護る。それがこんなことになるなんて、申し訳なき過ぎてどうしようもない。

「気にしなくて良い」

それはフィアには関わりのない話。

僕の、どうにもならない、初恋の話だ。

「ほらルエイエ。あれが×××だ。おまえと同じ、魔力持ちだつてよ」

「……ふうん」

少し離れた場所から紹介された少年は、庭を駆け回ってあちこちに汚れが着いていた。

「色々複雑な事情で兄貴が引き取ったそうだが、魔力制御が出来ないんだそうだ。教えてやってくれてよ」

眺めていると、×××は僕たちに気が付いて此方へ駆けて来た。

「こんにちは！あなたたちがお客様ですか？いらっしゃいませ！」

年の割にあどけない、というのが第一印象。オブラートを剥いでもっと素直に表現すると、
「あたま悪そう」だった。

「こんにちは×××。僕はルエイエ。君に会いに来た」

「！そっか、宜しくねルエイエくん」

しゃがみこんで僕に視線を合わせて笑う。その笑顔は屈託なく眩しかった。

「早速だけど一緒に遊ばない？今はね、えーと、蛙が採れるよ！」

「蛙」

思わず復唱すると、×××は「うん！」と力強く肯いた。それに父はバカ笑いしながら僕の背を押した。

「行ってこい行ってこい！おまえは偶にはそういう遊びもしねーとな！」

少し仲良くなると、×××は身の上も話してくれた。

「んー？引き取られた経緯？あー。あのね…魔力の暴発が多くて、住んでた場所を出て行かなくちゃいけなくなつてね。両親が疲れちゃったの」

それで養子に出されたのかと納得しかけた僕だったが、続く言葉に耳を疑った。

「それで家族皆で死ぬ事にしたみたいなんだけど、ひとり生き残っちゃったんだ」
あはは、と。軽い失敗を恥ずかしがる程度のノリで彼は笑った。

「だから今リフレッシュ中なの」

「…？」

「この子、本当はフィアっていうんだ」

そう言つて彼は自分の胸に手を当てた。

「色んな記憶^{データ}を私に移して、整理整頓^{リフレッシュ}初期化中」

「は……」

「それが終わったら、また私から必要なデータを移行して修復完了！」

あまりにも平然と……寧ろ楽しそうにそんな事を言うのが信じられなかった。

「あっ。安心して。ルエイエくんから教えて貰った事はちゃんと引き継ぐから。再起動したら、フィアの事も宜しくね」

「……僕はフィアの事は知らないから、約束は出来ないな」
ちよつとむくれてそう言うのと、×××は初めて困ったように笑った。

「聞いて聞いてルエイエくん。あっ、先生。ルエイエ先生」

「……いいよどっちでも」

いやいや先生だからと笑ってから×××が告げたのは、聞きたくない話だった。

「もうすぐフィアが再起動出来そうなんだ」

「……」

恐らく僕はぶすつとしていた事だろう。

「そんな顔しないで。私はフィアを生かす為にあるんだ。フィアが再起動したら、きみにもフィアを助けて、護ってあげて欲しい」

「……それは、君が消えてしまうという事だろう」

イヤだ、とは言えなかった。その時ばかりは自分の早熟さが厭になった。彼の存在意義と意思

を否定する事は出来なかった。

俯いた僕の頭を手を乗せて、彼は優しく微笑んだ。

「ありがとう。大丈夫だよ、ルエイエくん。フィアも、私だ。消えるというより、一緒になるの。ふふ。ねえルエイエくん。あのさ。きみとの記録も全部フィアに渡す予定だったけど」
 少しだけ言葉を切って。

「やめるね」

思わず顔を上げた。

悪戯に笑う顔があった。

「きみからの教えは伝えるけど、きみとの時間は『私』の物だ。ふふ、ちょっと矛盾するかな。けど、これくらい良いよね！」

ああ。これは、別れを惜しんだ僕への譲歩：餞別だ。彼はあくまでフィアの為に動いている。けれども僕はその言葉を嬉しく思ってしまったから。

「僕の初めての教え子の頼みだからな。フィアの事は必ず面倒を見る。約束だ」
 泣きじゃくったぐちゃぐちゃの声だった。

「ありがとう！ルエイエ先生！」

彼は眩しい笑顔で僕を抱き締めた。

そして、彼はフィアになった。

『分断された人格は統合された。過去の記憶は感情を伴わない記録として保持されているらしい。が、別人格が存在した事と君と遊んだ時間については記録もされていないようだ』

伯父からの手紙にはそのように記されていた。『仲良くしてくれていたのに申し訳ない』とも。とんでもない。それこそが彼が僕にくれたものなのだから。

「先生？あの…？」

いけない。フィアを見詰めたまま物思いに耽ってしまった。フィアが顔を赤らめて困惑している。

「もう塔を崩すような事はないと思うが、君はこの先も僕を手伝ってくれるかい？…側で君を、護らせてくれるかい？」

「…えっと」

フィアは一度目を逸らして、

「それって、きつと誰かとの約束なんですよね」

「うん。大事な約束だ」

もう何度も破られてしまった、でもまだ守りたい、大切な約束。

少し唇を尖らせたフィアは、それからしつかりと僕の目を見た。

「いやです」

「そうか」

流石に我儘が過ぎたか。仕方ない。酬いきれやしないが、これからは陰から見守って――

「漸く先生を助けられたので。これで一回、先生を守った実績も付いたので！」

「ん……？」

フィアは立ち上がって、僕の両手をがっしりと包んだ。

「今度は『私』と約束してください！一緒に……ええと……一緒に長生きしましょう！」

「ふは」

「!?」

「ははは、うん、あははは……！」

笑い出した僕に真っ赤になつて憤慨している。申し訳ない。だって。だってあまりにも。

そう。フィアはとても成長した。強くなった。独りで重荷を背負わされてもう逃げたりしなかった。助ける、護るなんて烏滸がましい。

「うん、うん。僕のフィアは、やっぱり格好良いね」

「っ！せっ……先生もっ、あのっ、か、かわいい……ですから……！」

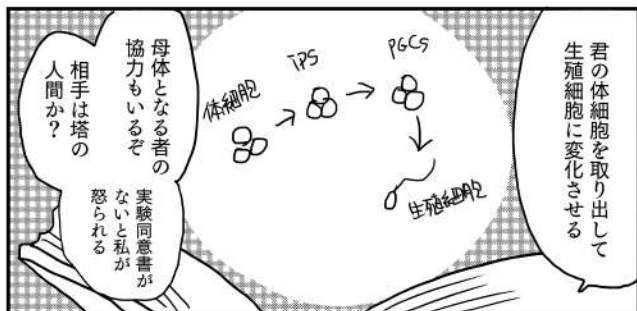
「おや。それは初めての誉め言葉だ。ありがとう」

フィアが傍に居てくれば母から魔女の称号を奪い取れる日も遠くないだろう。塔の魔女を名乗るのはこの僕だ。

さあ心機一転。第二の恋でも始めようか。







コクマ
の
塔



『コクマの塔 塔の魔女 』

著/加名山 炯斗



2021.11



@mothkate